

まえがき

公益社団法人日本心理学会は、学術誌として「心理学研究」と“*Japanese Psychological Research*”の2種類を発行しているが、本書はそれらの学術誌に論文を投稿しようとする人たちへの手びきとして作られた。

本書の内容は、両誌の各投稿規定に沿って論文を執筆する際、原稿作成に必要な基本的心構え、原稿の提出要領、技術的諸事項などを解説するものである。

本書の構成は次のようになっている。

「第1章」では、論文を書くにあたっての心構えや注意点について述べている。「第2章」では、論文投稿から掲載までの一連の流れを解説する。投稿原稿の具体的な作成方法について、「第3章」では「心理学研究」,「第4章」では“*Japanese Psychological Research*”の詳細を解説している。

巻末には、付録として「単位記号」,「校正記号とその意味」,「投稿のためのチェックリスト」および「倫理チェックリスト」を載せてあるので参照されたい。

目 次

まえがき	1
「心理学研究」と“ <i>Japanese Psychological Research</i> ”の沿革	6
第1章 論文を書くにあたって	7
1.1 論文の文章と用語	7
1.2 論文の構成	8
第2章 論文投稿から掲載まで	10
2.1 投稿資格	10
2.2 二重投稿、剽窃の禁止	10
2.2.1 二重投稿	10
2.2.2 剽窃	10
2.3 投稿方法	12
2.4 論文情報（入力順）	12
2.5 投稿原稿のアップロード（提出）	15
2.6 投稿者のためのチェックリスト	15
2.7 投稿論文の受稿	16
2.8 査 読	16
2.8.1 査読の手続き	16
2.8.2 査読の期間	18
2.8.3 論文の改稿	18
2.8.4 改稿論文の査読	18
2.8.5 採択、不採択の決定	18
2.9 採 択	18
2.9.1 通知	18
2.9.2 最終稿提出	18
2.9.3 論文の著作権	21
2.9.4 校正、刊行	21
2.9.5 必要経費	21
2.10 不採択	21
2.11 取下げ	21
2.12 再投稿	21

第3章 「心理学研究」の投稿原稿の作り方	24
3.1 論文の種類, 形式と長さ	24
3.1.1 論文の種類と定義	24
3.1.2 論文の形式	24
3.1.3 論文の長さ	24
3.2 論文情報	25
3.2.1 表題	25
3.2.2 著者名	25
3.2.3 所属機関名	25
3.2.4 「表題ページ」の脚注	25
3.3 本文	26
3.3.1 見出し	26
3.3.2 段落・見出し以外の序列	26
3.3.3 「本文中」の脚注	26
3.3.4 句読法	27
3.3.5 外国語	27
3.3.6 カタカナ・略語	28
3.3.7 特殊文字	28
3.4 数字・数式, 統計記号	28
3.4.1 数字	28
3.4.2 数式	29
3.4.3 統計記号, その他	29
3.5 単位	29
3.5.1 国際単位系	29
3.5.2 分量・倍量単位を表すための接頭語	29
3.5.3 単位記号の使用	30
3.5.4 SIに適しない例	30
3.6 引用・言及	31
3.6.1 文献の引用	31
3.6.2 文章の引用	32
3.6.3 図・表の引用	32
3.6.4 氏名・機関名への言及	33
3.7 表 (Table)	33
3.7.1 表の原稿	33
3.7.2 表作成上の一般的注意	33
3.7.3 表の番号, 表の題	35
3.7.4 表の注	35
3.8 図 (Figure)	35

3.8.1	図の原稿	35
3.8.2	図作成上の一般的注意	37
3.8.3	図の番号, 図の題	38
3.8.4	図の注	38
3.9	引用文献	38
3.9.1	文献を引用する場合の一般的注意	38
3.9.2	外国語文献の表記の仕方	39
3.9.3	日本語文献の表記の仕方	43
3.9.4	引用文献の記載順序	47
3.10	英文アブストラクトとキーワード	48
3.10.1	英文アブストラクト	48
3.10.2	キーワード	48
第4章	“Japanese Psychological Research” の投稿原稿の作り方	49
4.1	論文の種類, 形式と長さ	49
4.1.1	論文の種類と定義	49
4.1.2	論文の形式	49
4.1.3	論文の長さ	49
4.2	論文情報	50
4.2.1	表題	50
4.2.2	著者名	50
4.2.3	所属機関名	50
4.2.4	「表題ページ」の脚注	50
4.3	本文	51
4.3.1	見出し	51
4.3.2	段落・見出し以外の序列	51
4.3.3	「本文中」の脚注	51
4.3.4	句読法	52
4.3.5	英語以外の外国語	52
4.3.6	略語	52
4.3.7	特殊文字	53
4.4	数字・数式, 統計記号	53
4.4.1	数字	53
4.4.2	数式	53
4.4.3	統計記号, その他	53
4.5	単位	54
4.5.1	国際単位系	54
4.5.2	分量・倍量単位を表すための接頭語	54

4.5.3 単位記号の使用	54
4.5.4 SI に適しない例	55
4.6 引用・言及	55
4.6.1 文献の引用	55
4.6.2 文章の引用	56
4.6.3 図・表の引用	56
4.6.4 氏名・機関名への言及	57
4.7 表 (Table)	57
4.7.1 表の原稿	57
4.7.2 表作成上の一般的注意	57
4.7.3 表の番号, 表の題	58
4.7.4 表の注	58
4.8 図 (Figure)	59
4.8.1 図の原稿	59
4.8.2 図作成上の一般的注意	59
4.8.3 図の番号, 図の題 (キャプション)	61
4.9 引用文献	61
4.9.1 文献を引用する場合の一般的注意	61
4.9.2 文献の表記の仕方	63
4.9.3 日本語文献の表記の仕方	66
4.9.4 引用文献の記載順序	67
4.10 英文アブストラクトとキーワード	67
4.10.1 英文アブストラクト	67
4.10.2 キーワード	68
付 録	69
付録 1 単位記号	69
付録 2 校正の記号とその意味	74
付録 3 「心理学研究」投稿のためのチェックリスト	75
付録 4 “ <i>Japanese Psychological Research</i> ” 投稿のためのチェックリスト	76
付録 5 倫理チェックリスト	77
あとがき	79

「心理学研究」と“*Japanese Psychological Research*”の沿革

「心理学研究」（英文名は“*The Japanese Journal of Psychology*”）は公益社団法人日本心理学会が編集する日本語の機関誌で、心理学に関する論文を刊行する。「心理学研究」は旧日本心理学会会則第4条に基づいて、大正15年（1926年）4月に第1巻第1輯が刊行された。創刊より隔月に刊行し、年6冊をもって1巻とするのを原則としていた。なお、第10巻までは縦組で1巻は約900ページと決められていたが、第11巻（昭和11年）以降横組となり、1巻約700ページと編集規定に決められた。

昭和19年以降、数年間は不定期となり、第19—25巻までは年4冊をもって1巻としている。第26巻（昭和31年）以降、年6冊をもって1巻とする原則にもどった。刊行不定期時の巻輯・号の刊行年月は、第19巻1輯（昭和19年7月）、同2輯（昭和23年3月）、同3・4輯（昭和24年6月）、第20巻1号（昭和24年9月）、同2号（昭和25年3月）、同3号（昭和25年6月）、同4号（昭和25年12月）である。第21巻（昭和26年）以降は年1巻である。

現在「心理学研究」は1年1巻（4月—翌年3月）とし6号に分けて刊行され、論文の種類は「原著論文（Original Article）」、「研究資料（Methodological Advancement）」、「研究報告（Research Report）」、「展望論文（Review Article）」がある。最近の第85巻（2014年度）の総ページ数は622ページとなっている。

“*Japanese Psychological Research*”は公益社団法人日本心理学会が編集、刊行する英（欧）文の機関誌で、国内の原著論文を広く外国に知らせる目的で1954年3月に1号が刊行された。以後、4年間に不定期に5冊刊行されたが、1958年より年2冊刊行となり、1960年以降は年4冊となり、巻号制を採用することとなった。それにより不定期に刊行された1号より9号までがまとめられて第1巻とされ、1960年度刊行のものが第2巻となり、以後1年1巻4号の刊行が続けられている。なお、第1巻はA5変形判であったが、第2巻より、「心理学研究」と同じB5判となった。

現在“*Japanese Psychological Research*”は1年1巻（1月—12月）とし4号に分けて刊行され、論文の種類は“Original Article”、“Review”がある。最近の第56巻（2014年）の総ページ数は406ページとなっている。

第1章 論文を書くにあたって

自分の考えや発見などを人に伝えるために最も適した論文形式は何か。はじめて科学論文（論文）を書くにあたって、いかに構想を立て、どのようにして内容を書き進めるか、その心構えや守らなければならない規則を本章で述べる。

1.1 論文の文章と用語

論文は、広範な読者が理解しやすいように、簡潔明瞭な文体で書く必要がある。原則として、日本語では常用漢字・現代かなづかいを用いて原稿を作成する。また英語については、ネイティブの専門家の責任ある校閲を経た文章であることが不可欠である。英語論文の書き方については、次のものを参照することが望まれる。

American Psychological Association. (2010). *Publication manual of the American Psychological Association* (6th ed.). Washington, DC: American Psychological Association.

（アメリカ心理学会（APA） 前田 樹海・江藤 裕之・田中 建彦（訳）（2011）. APA 論文作成マニュアル 第2版 医学書院）

論文中は、一般的でない用語の使用はできるだけ避ける。論文の文章のスタイルについて、とくに留意すべき点を以下にあげる。

(1) 順序よく意見を述べる

読者が理解しやすいように、用語や概念間の関連性に配慮し、論旨の展開に一貫性をもたせること。それには、句読点の付け方に注意し、誤解を招かないつなぎ言葉（接続詞や関係代名詞）を用いること。

(2) 滑らかな表現

論文は、明確で論理的な文章でなければならない。自分の文章は、論理の飛躍、推論の矛盾点、時制の間違い、同意語の不用意な使用などに気づかないことがあるので、時間をおいて読み直したり、他者に読んでもらうことが望ましい。

(3) 無駄のない表現

定義の明確な用語を用いて、必要な事柄のみを記述した短い文が望ましい。一部の人々にしか分からない特殊な用語は避けること。長文になる場合は、文章の構造に注意すること。重複した表現は必要最小限にとどめ、内容のまとまりをもたせること。

(4) 箇条書き・体言止めの不使用

本文中に箇条書き、体言止めを用いることは、できる限り避けるようにする。

(5) 適切な言葉遣い

話し言葉は用いない。あいまいな表現、また、何を指し示すのか分かりにくい代名詞

の使用は避けること。略語を用いる際には、一般的なものを用いる。一般的な略語がない場合は、無理がない略語の使用を心がける。

(6) 日本語と外国語の混在の回避

日本語で論文を書く場合、すでに定着した翻訳語があり、また適切な日本語で表現できるものをわざわざ外国語で記載しない。たとえば、同一論文内で、あるときは“Dim 1”と書いたり、あるときは「次元 1」と書いたり、「認知者の self esteem の高低と…」などと書いたりするのは好ましくない。同じ論文の中に日本語と外国語を不統一に混在させないようにする。

(7) 正しい文法と語法

時制や記述方法に注意する。主語と動詞の関係を明確にし、代名詞・関係代名詞・従属接続詞を正しく使用すること。修辞語句の挿入の仕方に気を配り、差別用語や偏見と受け取られる言葉遣いを避ける。受動態と能動態を適切に使い分ける。

(8) 倫理的配慮

論文の作成にあたっては、「公益社団法人日本心理学会会員倫理綱領及び行動規範」の趣旨を踏まえ「公益社団法人日本心理学会倫理規程」(http://www.psych.or.jp/publication/inst/rinri_kitei.pdf) に則ること。

1.2 論文の構成

論文の主な構成としては、問題（序論）、方法、結果、考察、結論の各部分を含むことが望ましい。

(1) 問題（Introduction）

その論文で何を問題にするかを簡潔明瞭に書く。ただし、「問題（Introduction）」という見出しは印刷されない。先行研究に対する検討内容や仮説を含む。

(2) 方法（Method）

研究（実験、観察、調査、事例研究など）の対象、材料、方法、手続きなどについて、要点をもらさず詳細に書いておく必要がある。ただし、標準的方法あるいは同一方法を用いた既刊論文がある場合には、それを引用して記述を簡略にすることもできる。なお、実験参加者の個人情報の秘匿、保護など、研究倫理に関しても記述する。

(3) 結果（Results）

研究の結果を、内容の重要度に従って事実在即して忠実に述べる。自分の予期に反した事実も省略しない。

心理学における研究では統計的仮説検定が分析にしばしば用いられるが、仮説検定はデータ分析の一側面に限られる。必要に応じて仮説検定に限らず適切な分析手法を用いるのが望ましい。特に、仮説検定の適用にあたっては、前提とするデータの性質（データの分布の正規性や、標本相互の独立性など）が成立していることを確認する。

分析結果の記述においては、研究結果の重要性を評価できるよう効果量とその信頼区間も示す。元来の測定単位・尺度によって表された効果量は理解が容易であるが、必要

に応じて尺度に依存しない標準化された効果量の指標（Cohen の d や標準化回帰係数等）を示す。

データの欠測は分析の結果に大きな影響をしばしば与える。欠測を伴うデータを分析する場合には、欠測の頻度や件数を示すとともに、欠測の発生について経験的あるいは理論的な説明を記述する。分析において採用した欠測モデルの性質（MCAR, MAR, NMAR の区分）や、欠測に対応するために採用した方法（多重埋め合わせなど）について記述することが望ましい。

(4) 考察, 結論 (Discussion, Conclusion)

得られた結果を、従来の研究成果と比較し、その理論的意義を考察し、結論に至る過程を述べる。研究が複数に分かれている場合は、それぞれ方法、結果、考察を書いてもよい。ただし、その際は総合考察（General Discussion）が必要となる。

(5) その他に、表題はもちろんのこと、引用文献 (References), 図表 (Figure, Table), 英文アブストラクトとキーワード (Abstract, Key Words) などが必要である。

第2章 論文投稿から掲載まで

公益社団法人日本心理学会が刊行する学術誌は「心理学研究」と“*Japanese Psychological Research*”の2種類である。これらの学術誌の編集は、機関誌等編集委員会（以下「編集委員会」とする）の責任のもとに行われる。この章では、論文の投稿から掲載（刊行）に至るまでの過程を説明する（次ページの「投稿から掲載の流れ」も参照のこと）。

2.1 投稿資格

公益社団法人日本心理学会の学術誌は、原則として本学会会員の心理学に関する未公開の論文の発表にあてる。ただし、会員に準ずる非会員からの投稿論文でも、本学会に寄与するものは掲載が認められる。その場合、掲載料は著者の負担とする。

論文の掲載を希望する者は、所定の体裁を整えた論文（原稿）を作成、電子投稿システムから投稿し、編集委員会の査読を受けるものとする。

2.2 二重投稿、剽窃の禁止

2.2.1 二重投稿

両学術誌に掲載される論文は、すべて未発表のものであることが要求され、本学会では二重投稿を認めない立場をとっている（詳細はホームページの、「二重投稿」に対する公益社団法人日本心理学会の方針を参照のこと http://www.psych.or.jp/publication/pdf/duplicate_publication_20141001.pdf）。

二重投稿とは、同一の（または極めて類似した）内容の学術的著作物が同一の著者および連名者によって、複数回にわたり投稿されることを指し、代表的な例として、「ほぼ同一の内容の論文を複数の刊行物へ同時に投稿した場合」、「ほぼ同一の内容もしくは本来は一つであるべき内容を小さく分割して継時的に投稿した場合（いわゆるサラミ出版）」がある。

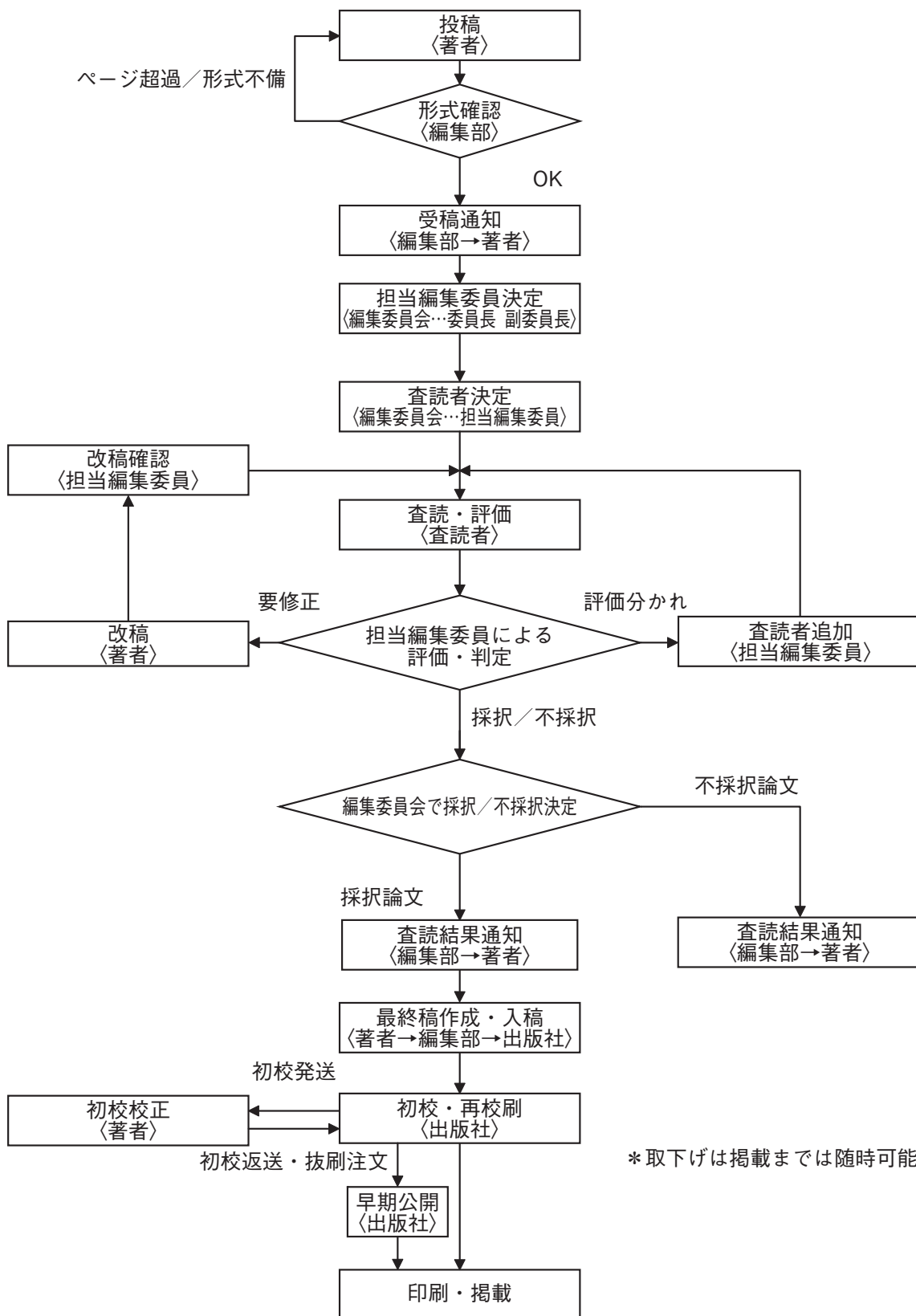
このような二重投稿が明らかになった場合は、当該論文は即時に却下される。二重投稿にあたるかどうかは編集委員会が判断する。

2.2.2 剽窃

研究業績や実験、データ、理論、仮説、アイデアなどを引用もしくは利用する場合には、そのことを本文で言及し、それらが記載されている論文や資料等の出典を明示する。出典を明示せずに引用・利用する行為は盗用（剽窃）とみなされる。

また著者自身の過去の業績を、新しい業績であるかのように発表する自己剽窃にも、注意が必要である。

投稿から掲載の流れ



2.3 投稿方法

両学術誌への投稿は、電子投稿システムにより行う。以下の URL より電子投稿システムにログインする（詳細は、著者マニュアルを参照のこと https://jpa.bunken.org/jpa/files/author_manual_jp.pdf）。

https://jpa.bunken.org/jpa/user_logins/jp/（日本語版）

https://jpa.bunken.org/jpa/user_logins/en/（英語版）

初めて投稿する著者は、ログインする前に新規アカウント発行（ユーザー登録）手続きを行う（見本 2.1, p.13）。日本語での入力可能な場合は、日本語版から行う。またすでに登録済みと表示される場合は、事務局編集部にお問い合わせる。

2.4 論文情報（入力順）（見本 2.2, p.14）

(1) 投稿誌と論文の種類

「心理学研究」では「原著論文（Original Article）」、「研究資料（Methodological Advancement）」、「研究報告（Research Report）」、「展望論文（Review Article）」、「*Japanese Psychological Research*」では“Original Article”，“Review”のいずれかを選択する。

各論文種類の定義については、3.1.1（p.24）、4.1.1（p.49）を参照のこと。

(2) 査読希望分野

知覚、認知、学習、感情、生理、発達、教育、臨床、人格、犯罪、社会、産業、文化、方法、原理、歴史、一般の中から、査読希望分野を3つまで選択できる。

(3) 表題

「心理学研究」では、表題（全角30文字程度）ならびにその英訳。“*Japanese Psychological Research*”では、英語の表題（12—15語程度）。

(4) 欄外略題（Running Head）

「心理学研究」の場合は、日本語で著者の姓を含め25文字（全角）以内，“*Japanese Psychological Research*”の場合は、略題のみでスペースを含めて50文字（半角）以内。

(5) 英文アブストラクト

論文の概要を100—175語以内にまとめる。「心理学研究」の場合は、日本語訳も入力する。

(6) 英文キーワード

その論文を特徴づける英語のキーワード3—5項目以内。「心理学研究」の場合は、日本語訳も入力する。

(7) 英文連絡先（Correspondence Address）

掲載後の英文連絡先。共著の場合は、その論文に関して責任をもって対応できる者の連絡先。

(8) 「表題ページ」の脚注

謝辞、研究発表、助成、利益相反（COI：Conflict of Interest）、所属機関変更、改姓

見本 2.1 電子投稿システム 新規アカウント発行画面

新規アカウントの発行

手順 1: ログイン画面

手順 1

[新規アカウント発行はこちら]をクリックしてユーザー登録を開始します。

手順 2: 登録画面

手順 2

必要な項目を入力します。
*は必須項目となります。
[アカウントを発行する]をクリックしてください。

手順 3: 登録完了

手順 3

登録完了
登録したメールアドレスに、ログインに必要な情報をお知らせするメールが配信されます。「☑ユーザー登録完了のお知らせ」メールが配信されない場合は、事務局編集部にお問い合わせください。

見本 2.2 電子投稿システム 論文情報、著者情報入力画面

手順 2: 論文情報

(英文誌・和文誌の選択 > 論文情報 > 著者情報 > 倫理チェックリスト > 投稿論文 > 確認画面 > 投稿完了)

手順 2
論文情報を入力してください。入力終了後、[次へ]ボタンをクリックしてください。一旦、ここで中断したい場合は、[途中保存]ボタンをクリックしてください。途中保存して論文情報一覧の保存リストに加えられます。⇒一時保存は P.9
※は必須項目です。

手順 3: 著者情報

(英文誌・和文誌の選択 > 論文情報 > 著者情報 > 倫理チェックリスト > 投稿論文 > 確認画面 > 投稿完了)

手順 3
著者情報を入力してください。
※は必須項目です。(氏名、ローマ字、メールアドレス)
共著者を登録する際には、[+]ボタンを押して枠を増やしてください。
[-]ボタンをクリックすることで枠を減らすことができます。
入力終了後、[次へ]ボタンをクリックしてください。一旦、ここで中断したい場合は、[途中保存]ボタンをクリックしてください。

- (名) など著者情報を含む脚注。
- (9) 「本文中」の脚注
補足説明のための「本文中」の脚注は必要最小限とし、「表題ページ」の脚注から続く、通し番号を付ける。
- (10) 編集委員会への連絡
- (11) 著者名
「心理学研究」の場合は日本語とローマ字（英語，原語）。“*Japanese Psychological Research*”の場合はローマ字（英語，原語）と日本人の場合は日本語。連名の場合は、電子投稿システムの「+（プラス）」ボタンを選択して枠を追加し、各々について入力する。
- (12) メールアドレス
- (13) 所属機関名
「心理学研究」の場合は日本語と英語表記。“*Japanese Psychological Research*”の場合は英語表記（日本人の場合は日本語表記も入力する）。
- (14) 倫理チェックリスト
倫理チェックリストのすべての質問に答える。「倫理チェックリスト」は、「執筆・投稿の手びき」の巻末にも掲載されている（付録5，pp.77-78）。

2.5 投稿原稿のアップロード（提出）

投稿論文の原稿（投稿原稿）は、この「執筆・投稿の手びき」に準拠したPDFファイルに限られる。A4判の白紙を縦置き、一般的フォントを使用し、文字の大きさは10.5ポイント以上、余白（上下，左右3cm以上）と行間を十分にとる。

- (1) 「心理学研究」では、1ページあたりの文字数を800字（25文字×32行）とする（見本2.3，p.16）。
- (2) “*Japanese Psychological Research*”では、1ページに入る行数はフォント，サイズにより異なるが、ダブルスペースとし、20—23行を目安とする（見本2.4，p.17）。
- (3) 投稿原稿はPDFファイルに変換して、電子投稿システムにアップロード（提出）する。電子投稿システム内のPDF変換機能でMicrosoft WordファイルをPDFファイルに変換することができる。査読の際に著者情報を伏せる必要上、著者名，所属機関名，連絡先，「表題ページ」の脚注などを投稿原稿内に記載してはならない。PDFファイルのプロパティなどにも著者情報が残らないよう注意する。
- (4) 投稿原稿の内容は、表題，英文アブストラクトとキーワード（「心理学研究」の場合は日本語訳も），本文，引用文献，「本文中」の脚注，図表，付録の順とする。参考資料などは別ファイルにして，参考資料欄にアップロード（提出）する。

2.6 投稿者のためのチェックリスト

「執筆・投稿の手びき」の巻末に掲載した「投稿のためのチェックリスト」を参照の上，誤

りのないことを確認して投稿すること（付録 3，付録 4，pp.75-76）。

2.7 投稿論文の受稿

投稿論文は，まず事務局編集部において，この「執筆・投稿の手びき」に準拠しているか否かをチェックし，不備のない場合は受稿を著者に連絡する。形式を逸脱したものは受稿せず，それらの点について修正を求めるので，かならず形式を確認した上で投稿すること。

2.8 査読

2.8.1 査読の手続き

(1) 担当編集委員の決定と査読者の選定

編集委員の中から受稿論文の担当編集委員 1 名を決定する。担当編集委員は査読者 2 名を選定する。査読者は会員・非会員を問わない。

見本 2.3 「心理学研究」本文原稿見本

を強めるとされる（尾田，2006）矢印の末端が広がっている矢印を付加したデザイン（遠近矢印デザイン）も作成した（Figure 1, Figure 2）。

Figure 1

避難口誘導灯はその目的から学習なしで意味を理解できるものでなければならない。そこで実験 1 では，避難口誘導灯の新しいデザインが正しく理解されるかについての検証を行うため，実験参加者が避難口誘導灯のデザインを見て避難経路を正しく記述できるかを測定した。さらに，実験参加者に避難経路の回答後に問題の難易度の評定を求めることで，その回答が容易に導き出されたものかどうかについての検討を加えた。

Figure 2

実験 1

実験方法

実験参加者 大学生 154 名に以下の 6 種類の避難口誘導灯のデザインを無作為に振り分けた。このうち，出発地点が指定の地点と異なるなど教示を理解していなかった 9 名の回答を除外し，145 名を分析の対象とした。

実験素材 実験に使用した避難口誘導灯のデザインは，従来デザイン，矢印デザイン，遠近矢印デザインの三つのデザインに，それぞれ左右方向の 2 種類を掛け合

（田中 孝治・加藤 隆（2012）．避難口誘導灯に通過後の情報を付加することの効果 心理学研究，83，182-192．より一部変更）

(2) 査読者による査読

受稿論文は査読者2名に、著者情報を伏せて依頼され、査読される。査読者名は著者には公表されない。

(3) 担当編集委員による判定

査読者による評価に基づき、担当編集委員の判定が行われる。

- i) 「このままで採択」
- ii) 「多少修正の必要あり」の場合には、修正・加筆が求められる。
- iii) 「大幅に修正・加筆後、再査読」の場合には、改稿が求められる。
- iv) 「照会后、再査読」の場合には、照会、問題点に対する回答が求められる。
- v) 「不採択」
- vi) 2名の査読者の評価が「不採択」とそれ以外に分かれた場合、第3の査読者が追加される。

見本 2.4 “*Japanese Psychological Research*” 本文原稿見本

modalities and participants are required to identify the letters.

Experiment 1

Method

Participants. Ten university students (age 23–34 years; 2 females) served as paid voluntary participants in the experiment. They gave informed consent prior to their inclusion in the study. All had normal or corrected-to-normal visual acuity and normal touch (self-report).

Apparatus and stimuli. The experiment was conducted in a dark environment. The participant's head was stabilized by a chin rest. He/she wore headphones with constant white noise at an intensity level sufficient to mask the sound produced by the vibrotactile stimulator. Participants were presented with the following stimulus conditions: (a) visual stimuli alone, (b) tactile stimuli alone, and (c) visual-tactile bimodal stimuli where both stimuli were simultaneously presented.

The tactile targets were presented through a vibro-tactile stimulator (Optacon II: Model R2B, Telesensory Systems Inc.) on the participant's left index finger (Figure 1). The tactile stimuli were letter-like dot patterns of “L” and “T” about 9 mm high and 5 mm wide (Figure

Figure 1

(Wada, Y. (2010). Multisensory Integration of Vision and Touch in Nonspatial Feature Discrimination Tasks. *Japanese Psychological Research*, 52, 12–22. より一部変更)

2.8.2 査読の期間

受稿あるいは改稿受付から査読終了までに要する期間は、論文により多少の差はあるが、査読者、担当編集委員にはそれぞれ1回の査読を1ヵ月で終了するように依頼している。しかし、第3の査読者を追加するなど慎重を期することから時間がかかる場合がある。

2.8.3 論文の改稿

受稿論文は、担当編集委員、査読者のコメントを付けて、期限つきで改稿を求められることが一般的である。その際の注意事項を以下にあげる（見本 2.5, p.19, 見本 2.6, p.20）。

- (1) 査読者のコメントをできる限り尊重して改稿する。
- (2) 「著者からの回答」には、査読者のすべてのコメントに対して、原稿のどこをどのように改稿したか（あるいは改稿しなかったか）を明確に記述すること。修正対照表はなくてもかまわないが、要求がある場合には、その限りではない。
- (3) 査読者のコメントが著者の立場と違っていると考えられる場合には、指摘された問題点に対して十分説得し得る資料・論拠を、「著者からの回答」か、本文中に追加する。
- (4) 改稿原稿、「著者からの回答」を整えたら、当該論文の改稿として、投稿時に準じて、電子投稿システムにアップロード（提出）する。論文情報欄（表題、英文アブストラクト、脚注他）も忘れずに修正する。
- (5) 改稿の形式に不備がある場合、事務局編集部から、それらの点についての修正を求めることがある。
- (6) 著しく改稿が遅れた（半年以上）ときには、取下げ扱いとすることもある。

2.8.4 改稿論文の査読

著者によって修正・加筆され再提出された改稿論文は、担当編集委員が確認し、再度の査読が開始される。論文によっては、数次にわたり査読され、修正が求められる場合もあり得る。

2.8.5 採択、不採択の決定

採択、不採択は、すべての査読者からの最終評価が得られた後、担当編集委員が採択、不採択を判定し、隔月に開催される編集委員会で審議し最終的に決定する。

2.9 採 択

2.9.1 通知

編集委員会で採択が決定した論文は、著者にその旨が通知される。編集委員会で採択が決定した日を論文の受理日とし、その後の論文の訂正・加筆は原則としてできない。

採択論文の掲載は原則として受理日、受稿日、論文種類によって決定するが、編集上の都合で多少前後することもある。

2.9.2 最終稿提出

事務局編集部からの連絡に従い、著者は速やかに最終稿の電子データを提出する。図表のファイル形式に注意し、なるべく高解像度のファイルにすること（たとえば、Microsoft Excel, TIFF, JPG, PNG, BMP）。

見本 2.5 「心理学研究」修正見本

論文修正上の注意

論文の修正は、再査読時にわかりやすいようにお願い致します。査読コメントに対する回答を提出してください。また、修正対照表（修正前と修正後の部分に対応させた抜き書きの表）はなくてもかまいませんが、要求がある場合は作成してください。

1. 原稿の修正の仕方

査読の効率化と誤り防止のため、できるだけきれいな原稿をお送りください。原稿 PDF ファイルには、表題、英文アブストラクトとキーワード、本文、引用文献、「本文中」の脚注、図表、付録を含め、著者情報（著者名、所属機関名、連絡先、「表題ページ」の脚注（研究助成、謝辞など））は記載しないでください。

2. 「著者からの回答」（修正コメント）

査読者のすべてのコメントに対して、原稿のどこをどのように修正したか（あるいは修正しなかったか）を明確に記述してください。

査読者のコメントに賛成できない場合は、指摘された問題点に対して十分説得し得る論拠を述べてください。

3. 修正対照表について（査読者から要求があった場合）

- ・原則として、修正部分の多少にかかわらず、すべての修正箇所を抜き書きしてください。
- ・ただし、論文全体に頻出する同一語句を修正する場合は、一回指摘していただければ結構です。
- ・大幅に書き直した場合には、その修正方針、内容を査読者のコメントに対する著者の意見としてまとめてください。
- ・修正対照表は、参考資料欄に提出してください。

4. その他

- ・本文修正に伴う引用文献の変更や図表番号の変更にもご留意ください。
- ・論文情報画面もあわせて修正してください。
（表題、英文アブストラクトとキーワード、脚注、倫理チェックリスト）
- ・著者情報画面の修正は、事務局編集部へご連絡ください（所属機関変更、改姓（名））。
- ・引用文献中の誌名は略さずに書いてください。

修正対照表

旧論文	訂正論文
<p>p.2, l.7-11 この discrepancy と態度変化の間には、たとえば Bochner & Insko (1966) の研究のように、健康や快適さの上で一日に必要な睡眠時間として 0 時間がよいとする極端に discredant なメッセージ効果をも含めれば、曲線の関係が多く見いだされている。</p> <p>p.2, l.16-p.3, l.11 そして説得的メッセージ研究の文脈で仮定……努力を随伴しがちになるからである。</p>	<p>削除 理由：論文の論理的体系化のためには、他の説明は補助的にとどめるべきだとの御指摘による訂正</p> <p>p.4, l.5-16 Aronson (1961) は努力の度合が大きくなるほど…… 説得的メッセージ研究で得られた知見とも一致するものである。 （この部分は、表現の仕方をできるだけ論理的にするために組み直したもので、本質的には旧論文と変化はないと考えられる。よって簡略にしておいた。）</p>

見本 2.6 “*Japanese Psychological Research*” 修正見本**Revising your manuscript**

When revising your manuscript, please it is important to ensure that the reviewers can easily identify the changes you have made to the manuscript. Also, when submitting the responses to reviewers' comments, please provide a table of corrections showing the sentences before and after the corrections, if requested by the reviewers. However, you are not required to provide a table of corrections if the reviewers have not requested it.

1. Revising the manuscript

To ensure that the editing process is efficient and to prevent errors, please make sure that your manuscript is as error free as possible. The PDF file of your manuscript should include the title, abstract, keywords, main text, references, footnotes, figures and tables, as well as the appendixes. Information about the authors such as the name, affiliation, correspondence address, research grants, and acknowledgments, among others, should not be included in the PDF file.

2. Responses to reviewers' comments

Please describe precisely the sections of the manuscript that were revised (or not revised) corresponding to the comments by each reviewer. When you do not agree with a reviewer's comment, please describe your reasons for the disagreement.

3. The table of corrections (when requested)

*In principle, please include all the corrections that were made in the table, regardless of their length.

*When you have changed a word that appears repeatedly throughout the manuscript, it should be indicated in the table only once.

*When you have made a major revision, please indicate the reason and the content of your revision as a general opinion about the reviewers' comment.

*Please submit the table by attaching it to the reference materials.

4. Other issues

*When you revise the main text, please make sure that corresponding changes are also made to the reference list and figure and table numbers.

*Please make sure that you have also revised the information about the manuscript, such as the title, abstract, keywords, footnotes, and the ethical checklist.

*Please contact our Editorial Office when you correct information about the authors, such as their affiliations, or names.

*Please use full journal titles in the reference list instead of abbreviations of the titles.

2.9.3 論文の著作権

掲載論文の著作権は、公益社団法人日本心理学会に帰属し、両学術誌に掲載された論文を許可なくして複製および転載することは、禁じられている。なお、著者はこれに関する同意書の提出を求められるが、著作者人格権についてはその限りではない。

2.9.4 校正、刊行

最終稿を出版社に入稿後、初校が著者の元に送られるまで、約2ヵ月かかる。著者校正は初校のみ行う。初校は、誤字・脱字の訂正に限り、最終稿以外の訂正・加筆は認められない。著者校正は、必ず読み合わせを行い、できる限り速やかに最終稿と共に指定の場所に送付する。

再校校正は出版社が行い、印刷、刊行に進む（見本 2.7, p.22, 見本 2.8, p.23）。刊行までに時間がかかる場合には、オンラインで早期公開（Early View）を行っている。

2.9.5 必要経費

会員が投稿した場合には、掲載料を必要としない。ただし、超過やカラーページなど特別の費用を要したときは、実費を支払わねばならない。

「心理学研究」では、英文校閲その他の諸費用が編集手数料として、各論文一律 10,000 円請求される。第1著者が非会員の場合は、掲載時1ページあたり 20,000 円の非会員掲載料を要する。

“*Japanese Psychological Research*” の場合、編集手数料、非会員掲載料は必要としない。

両誌共に、著者に対して抜刷 20 部を贈呈する。それ以上の抜刷は著者の負担とする（抜刷代は、1部 300 円である。初校著者校正返送時に抜刷の発注部数を申し込む）。

これらの経費は、掲載誌刊行後に請求される（金額はいずれも 2015 年現在）。

2.10 不採択

編集委員会で不採択が決定した論文は、著者に査読コメントと共にその旨が通知される。

2.11 取下げ

著者は、どの段階でも投稿論文を取下げることができる。その旨事務局編集部へ申し出る。

2.12 再投稿

取下げ、不採択後に論文を改めて投稿する場合は、再投稿となる。査読は新規投稿と同様に行うが、「編集委員会への連絡」欄に前稿の論文番号を記載し、「参考資料」欄に「著者からの回答」をアップロード（提出）する。

問い合わせ先

不明な点については、公益社団法人日本心理学会事務局編集部（Tel：03-3814-3953, E-mail：jpaednew@psych.or.jp）に問い合わせる。

両眼固視中の片眼におけるコントラスト感度の低下¹小澤 良² 鬢櫛 一夫 中京大学

Decline of monocular contrast sensitivity during binocular fixation

Ryo Kozawa and Kazuo Bingushi (Chukyo University)

To investigate binocular single vision, we examined monocular contrast sensitivity during binocular fixation by changing the intervals between the beginning of fixation and a probe stimulus, within 10 seconds. Monocular contrast sensitivities were quite stable within 1s of the interval delay in both eyes, but they were reduced in either eye if the interval delay was more than 1s (Experiment 1). In Experiment 2, a similar stimulus was monocularly presented. In this case, decline of contrast sensitivity was not observed in either eye. In Experiment 3, when the stimulus was interrupted briefly before the probe presentation, the contrast sensitivity was recovered. These results suggest that after prolonged viewing the binocular system does not sustain either eye sensitivity equally unless there is interruption of the binocular stimulation.

Key words: binocular single vision, monocular vision, contrast sensitivity, fixation.

The Japanese Journal of Psychology

2013, Vol. 83, No. 6, pp. 536-545

doi.org/10.4992/jjpsy.83.536

両眼は約 6.5 cm 離れているため両眼視差 (binocular parallax) が生起するので、観察者から見て様々な距離にある視対象はそれぞれの眼の網膜上の非対応点に結像する。この両眼網膜像差 (binocular disparity) は奥行き知覚 (Julesz, 1960; Wheatstone, 1838) や輻輳・開散眼球運動 (Rashbass & Westheimer, 1961) の手がかりとされている。

一方、網膜像差が一定範囲の場合、両眼単一視が可能となる (Collewijn & Erkelens, 1990)。すなわち網膜像が両眼間で完全に同一でなくても、我々は外界を一つのものとして知覚できる。視覚系が両眼で異なる情報をどのように処理して両眼単一視を成立させているかについては長く議論されてきた。すなわち各眼の入力情報の利用については、二つの理論が提唱されている。一つは、両眼からの情報が必ずしも同時かつ均等に利用されないとする抑制理論である (Kaufman, 1974; Ogle, 1962)。これに従えば、両眼単一視は片方の眼からの入力、もう片方の眼からの入力を抑制す

ることにより生起する。つまり、視野の一部、または全体の知覚は実質的に単眼視によるものであるとされている。他方は、網膜像の情報を均等に利用し、それらを融合することで両眼単一視の生起を説明する融合理論である (Blake & Camisa, 1978; Fox & Check, 1966a, b; Julesz, 1971; Sperling, 1970)。

Fox & Check (1966a) は、両眼で同一の刺激を提示した両眼単一視成立時と両眼で異なる刺激を提示した視野闘争生起中においてそれぞれ単眼に検査刺激として 100 ms のフラッシュを提示し、フラッシュの検出反応時間を比較した。両眼同一刺激条件と視野闘争で優位眼提示のフラッシュでは検出反応時間は差がなかったが、視野闘争で抑制眼では検出反応時間が遅くなった。また、刺激が単眼のみに提示された場合も、フラッシュの検出反応時間は遅くならなかった。この結果は両眼単一視成立時には、視野闘争時のようなどちらか一方の眼の抑制が起こっていないこと、すなわち両眼融合時には各眼の情報が均等に用いられ融合されていることを主張している。ただし、彼らは刺激コントラストを独立変数として用いておらず、両眼融合成立時に単眼のみが抑制されていたとしても、その検出閾値を超えていた可能性もある。

これに対し、Ono, Angus, & Gregor (1977) は円形ステレオグラムを刺激とし、それが視野内の中心に見えている時間、中心より水平方向にずれて見える時間を測定した。その結果、両眼網膜像差が比較的小さい

Correspondence concerning this article should be sent to: Ryo Kozawa, Department of Psychology, Chukyo University, Yagotohonmachi, Showa-ku, Nagoya 466-8666, Japan. (E-mail: xxx@xxx)

¹ 本研究は 2009 年度中京大学特別研究助成を受け行われた。

² 本実験で使用した刺激の作製にあたり、名古屋柳城短期大学の高瀬 慎二先生には大変お世話になりました。ここに記して謝意を表します。

見本 2.8 “*Japanese Psychological Research*” 掲載見本

Japanese Psychological Research
2009, Volume 51, No. 4, 246–257

doi: 10.1111/j.1468-5884.2009.00407.x

Nine- to 11-month-old Infants' Reasoning About Causality in Anomalous Human Movements¹

DAISUKE KOSUGI^{2*} *Shizuoka Institute of Science and Technology*

HIRAKU ISHIDA *Gifu Shotoku Gakuen University, Junior College*

CHIZUKO MURAI *Tamagawa University*

KAZUO FUJITA *Kyoto University*

Abstract: Two habituation experiments investigated 9–11-month-old infants' reasoning about causality in anomalous human movements. During habituation, infants saw an event in which a person walked toward a stationary person behind an occluder who fell down after an interval. Then, the infants were tested with two events without the occluder: the contact event in which the first person pushed the second one to fall down and the no-contact event in which the second person fell down without any contact. In Experiment 1, in which the persons were face-to-back, infants looked at the no-contact event for a longer time, whereas in Experiment 2, in which the persons were face-to-face, they looked at both the events for equal duration. Thus, infants considered it unnatural when a person fell down without external force in the absence of any action from a distance (e.g. communication). Infants seem to apply the physical contact principles to human movements in certain cases.

Key words: causal cognition, physical causality, social causality, communication, infant.

Humans are special among entities for infants because, for example, humans nurture them, serve as potential models to imitate, and interact intentionally with them (Gelman & Opfer, 2002). This is why infants differentiate humans from other objects. Related to this notion, recent progress in infancy research has provided evidence that infants treat humans differently from inanimate objects. For example, in face-to-face interactions, infants as

young as 2 or 3 months old are more likely to display a repertoire of social behaviors (e.g. smiling and vocalizing) toward responsive people than toward interactive objects (for a review, see Legerstee, 1992). Further evidence of an early distinction between a person and an animated physical object has been provided in studies on imitation showing that infants are more inclined to imitate actions performed by a person than by an animated object

*Correspondence concerning this article should be sent to: Daisuke Kosugi, Shizuoka Institute of Science and Technology, Fukuroi, Shizuoka 437-8555, Japan. (E-mail: xxx@xxx)

¹This research was supported by Grants from the Ministry of Education, Science, Sports and Culture in Japan to D. Kosugi (17730390) and to K. Fujita (12011209).

²We thank Yoshio Yano, Masaki Tomonaga and Shoji Itakura for their valuable comments on the manuscript. We also want to thank Junko Matsumoto, Nobuyuki Kawai and Gregg McNabb for their kind help.

第3章 「心理学研究」の投稿原稿の作り方

本章では、「心理学研究」へ論文を投稿する際に、守らなくてはならない一般的な約束が述べられている。投稿論文（投稿原稿）を作成するために必要な事柄を、実際の電子投稿システムの入力画面とは異なるが、掲載される学術論文の形式にあわせて説明している。

3.1 論文の種類、形式と長さ

3.1.1 論文の種類と定義

- (1) 原著論文（Original Article）：原則として、問題提起と実験、調査、事例などに基づく研究成果、理論的考察と明確な結論をそなえた研究。掲載時 10 ページ以内。
- (2) 研究資料（Methodological Advancement）：新たな実験装置や解析プログラムの開発、新たな心理測定尺度の作成やデータベースの構築など、研究の遂行に有用な新たな方法、技術およびデータに関する報告。掲載時 10 ページ以内。
- (3) 研究報告（Research Report）：すでに公刊された研究成果に対する追加、吟味、新事実の発見、興味ある観察、少数の事例についての報告、速報性を重視した報告、萌芽的発想に立つ報告。掲載時 6 ページ以内。
- (4) 展望論文（Review Article）：心理学の最近の重要テーマについて、研究状況、主要成果、問題点等を解説し、研究の意義と今後の課題を論じる。掲載時 20 ページ以内。

3.1.2 論文の形式

投稿原稿は A4 判の白紙を縦置きにして使用する。各ページは、上下、左右に 3 cm 以上の余白を取り、25 文字×32 行（800 字）とし、10.5 ポイント以上のサイズの文字を用いる（見本 2.3, p.16）。原稿には通しページを付ける。

また、英文は、一般的フォント（見やすいもの）および 10.5 ポイント以上のサイズの文字を使用し、行間はダブルスペースとする。1 ページに入る行数はフォント、サイズにより異なるが、20—23 行を目安とする。

3.1.3 論文の長さ

論文の長さは、表題、著者名、所属機関名、英文アブストラクトとキーワード、本文、引用文献、脚注、図表、付録などすべてを含め、論文種類ごとの規定ページ内におさめる必要がある。論文の掲載時の長さは、以下のように見積る。

- (1) 表題部分（表題、著者名、所属機関名、英文アブストラクトとキーワード、英文連絡先、「表題ページ」の脚注）は掲載時約半ページと見積る（著者が 5 名以上の場合は 2/3 ページ）。
- (2) 本文は全角 25 文字×32 行（800 字）×3 ページ（2,400 文字）で掲載時 1 ページに相当

する。

- (3) 引用文献は25文献で掲載時1ページに相当する。外国語文献の翻訳表記はプラス1文献で数える。
- (4) 表は横全角50文字×縦50行で掲載時1ページに相当し、25文字×50行で半ページに相当する。
- (5) 図は図中の一番小さな文字が7ポイントの大きさになるよう縮小／拡大し、横14cm×縦21cmで掲載時1ページに相当する。片段は7cm×21cmで半ページに相当する。

3.2 論文情報

3.2.1 表題

表題は、論文の内容に即したものとし、長さは、30文字を超えないことが望ましい。副題は、できるだけ避ける。一連の研究の場合でも、番号の異なる同一表題は好ましくない。やむをえずそうする場合は副題としてそれを用い、主題は別に付ける。副題の前後を、2倍ダッシュ（——）ではさむ。表題は日本語とその英訳を併記する。

3.2.2 著者名

著者名は日本語とローマ字（英語、原語）表示を併記する。著者が改姓（名）をした場合は、括弧内に併記するのではなく、脚注として旧姓（名）を明示することが望ましい。

連名者は、その論文の内容に責任を持つ協力者に限られ（単なる補助者、部分的協力者は、連名者とはせず、必要があれば「表題ページ」の脚注において謝辞を述べる）、研究貢献度に従って順に並べることを原則とする。

3.2.3 所属機関名

- (1) 所属機関名は正式名称を、日本語と英語で表記し、すべての著者について記す。所属機関名は、部局などは掲載しない。たとえば大学の場合、大学名のみを掲載し、学部、学科、専攻などは必要があれば「表題ページ」の脚注として付記する。
- (2) 著者の所属機関が、投稿時から変わった場合、あるいは研究を行った機関が、現所属機関とは異なる場合は、「表題ページ」の脚注にその旨を記す。
- (3) 非常勤の勤務先を所属機関として掲載する場合は、当該機関の承諾を必要とする。

3.2.4 「表題ページ」の脚注

「表題ページ」の脚注は、掲載時、表題ページの欄外に印刷される。脚注を付ける場合、該当箇所の右肩に上つき数字（¹, ², ³）、通し番号で脚注番号を付ける。「表題ページ」の脚注で示す例をあげる。

- (1) 文部科学省、日本学術振興会などの科学研究費補助金などによる研究の発表である場合、利益相反について、大会で発表している場合など、研究についての補足は、表題（主題）に脚注番号を付ける。

¹本研究は、平成26年度日本学術振興会科学研究費補助金（若手研究B、課題番号xxx、研究代表者xxxx）の助成を受けた。

²本研究結果の一部は、日本心理学会第78回大会（2014）で発表された。

³本論文は第1著者が平成26年度にxxx大学xxx研究科へ提出した修士論文の一部を加筆・修正したものである。

- (2) 謝辞を述べたい場合、第1著者名に脚注番号を付ける。
- (3) 著者が改姓（名）をした場合や、所属機関については、該当の著者名に脚注番号を付ける。
- (4) 論文に関する連絡先は、掲載時の英文連絡先とし、共著の場合は、その論文に関して責任をもって対応できる者の、著者名、所属機関名、住所、メールアドレスを次の要領で示す。

（著者名），（部局），（所属機関名），（町，区，市），（都道府県：市があれば省略）（郵便番号），（国名），（メールアドレス）

Correspondence concerning this article should be sent to: Taro Shinri, Department of Psychology, Faculty of Letters, xxx University, Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo 113-xxxx, Japan. (E-mail: xxx@xxx)

3.3 本文

3.3.1 見出し（見本2.3, p.16）

本文での見出しは、以下の3種類のみ用いられる（一部を省略してもよい）。見出しはゴシック、ボールド体とし、番号は付けない。

- (1) 中央大見出し：行の中央におき、その上下は1行あける。
- (2) 横大見出し：1行あけ左端から書き、本文は改行して始める。
- (3) 横小見出し：行をあけず、左端から全角1文字あけて書き、本文は1文字あけて続ける。

3.3.2 段落・見出し以外の序列

内容のまとまりごとに段落をつける。段落ごとに改行し、左端から全角1文字分下げする。

- (1) 段落に序列をつける

関連性のある内容の段落に序列をつける場合は、算用数字で番号を付け、文章で簡潔に表現し、順次改行して用いる。コロン（:）やスペースを入れるなど、見出し扱いにはできない。

1. …
2. …
3. …

- (2) 段落内で序列をつける

文章中、または段落内で序列をつける場合には、(a) …, (b) …, (c) …, のようにアルファベットに括弧を付け、改行せずに文章を続けていく。コロン（:）やスペースを入れるなど、見出し扱いにはできず、(1), 1), ①, a) などは使用できない。

3.3.3 「本文中」の脚注

「本文中」の脚注は、論旨を進めていく上で参考になることや、本文中に入れると混乱

を招くような事柄の補足的説明に用い、最小限にとどめる。

- (1) 掲載時、該当ページの欄外に印刷される。
- (2) 「表題ページ」の脚注から続く通し番号を、該当箇所の文末の右肩に上つき数字^(1, 2, 3)で付ける。見出しには付けない。
- (3) 脚注文は、原稿の引用文献の次のページにまとめて記す。
- (4) 著作権に関する注釈は、必要であれば「本文中」の脚注に記載する。
- (5) 抄録が公刊されていない場合、また書簡、私的な小集会での発表、発言、非公式の意見交換などは私信 (Personal communication, 年月) として扱い、引用文献ではなく「本文中」の脚注に記す。

3.3.4 句読法

- (1) 句点 (。) と読点 (,)

句点はマル (。), 読点はカンマ (,) を用いる。

- (2) 中黒 (黒丸) (・)

並列する同種の語を列挙する場合、あるいは外国語のカタカナ書きの場合などに、語と語の間に中黒を用いる。

- (3) ハイフン (-)

英語の対語・対句の連結、合成語に用いる。

- (4) ダッシュ (—)

i) ダッシュ (1 字分: —) は、期間や区間を示すのに用いる。波線 (～) は用いない。

ii) 2 倍ダッシュ (2 字分: ——) は、注釈的説明を挿入する際や日本語表題の副題に用いる。

iii) 2 分ダッシュ (半字分: -) は、日本語では対句、英語では期間、引用文献のページを表すのに用いる。

- (5) 引用符 (「 」, 『 』, “ ”, ‘ ’)

原則引用符は、日本語では「 」, 英語では “ ” を用いる。

- (6) 丸括弧 ()

原則として、() を使用する。

- (7) コロン (:)

例, 説明, 仮説, 引用文などを導く場合、外国語文献の副題などに用いる。

- (8) セミコロン (;)

検定結果を列挙する場合、あるいは括弧内に引用文献を列挙する場合に用いる。

3.3.5 外国語

本文中における専門用語の外国語表記は、可能な限り避けるようにする。なお、次の場合には外国語を用いることができる。

- (1) 外国人氏名などの固有名詞
- (2) 専門用語を外国語で、そのまま表記することは望ましいことではない。必要があれば、日本語訳の初出のときに外国語を括弧内に書き添える。

- (3) 引用文献, テスト名, 尺度名
- (4) 動植物のラテン語学名

3.3.6 カタカナ・略語

- (1) カタカナ

動植物の和名はカタカナで書く。また, 一般に日本語化された外国語, 外国地名, 国名は用法に従ってカタカナで書く。

- (2) 略語

一般に用いられている略語以外はなるべく用いない。略語法について注意すべき点を次に列挙しておく。

- i) テスト名や長い専門用語の略語を用いるときは, 原典初出のときに, (以下…とする) として略語を付ける。
- ii) 略語には大文字を用いる。字間をあけたりピリオド (.) を付けたりする必要はない。特にピリオドを付けた形で用いることが慣習になっている場合には, 慣習どおりの形で用いる。

3.3.7 特殊文字

- (1) イタリック体を用いる場合

- i) 本文中に引用されている外国語書籍名, 外国語雑誌の名称と巻数
- ii) 統計法に用いられる記号 (例: M , SD , t , F , p , df , ns など)
- iii) 動植物のラテン語学名および特殊な専門用語
- iv) イタリック体を本文中で特定の語句を強調するために用いることはできない。

- (2) ボールド体を用いる場合

原則として本文中の各見出しと, 表の因子構造を強調する数値に限られる。本文中で特定の語句を強調するために用いることはできない。

- (3) アンダーライン・傍点は, 原則として用いない。

3.4 数字・数式, 統計記号

3.4.1 数字

- (1) 算用数字

数を表示する場合は, 原則として算用数字を用いる。

- (2) 漢数字

漢字などと結合して名称を表す用語および概数を表す場合, 純粋な数の概念から離れすぎたもの, 物の名称になっているもの, 慣習として特殊な語感を有するものには, 漢数字を用いることができる (たとえば, 一つ, 一人, 約百人…)。

- (3) ローマ数字

原則として事例番号 (たとえば, 実験 I), あるいは慣用表現 (たとえば, Type II error) などの記述にのみ用いる。

3.4.2 数式

論文中の数式には、すべて通し番号を付ける。

- (1) 数学記号、量記号および変数の記号はイタリック体とし、なるべく JIS (Z8201, Z8202 参照) などで定められたものを使用する。
- (2) 単位、演算を表す記号はローマン体を使用する。
- (3) 分数式は原則として、 $\frac{(a+b)}{(c+d)}$ のように表し、本文中に入れるときは、 a/b , $(a+b)/(c+d)$ のように表す。
- (4) \sin , \log , \exp などの記号は、ローマン体で表す。
- (5) 2つ以上の関連する数式を続けて上下に並べて書くときには、等号の位置でそろえる。

3.4.3 統計記号, その他

- (1) 統計概念の記号として用いる文字は、イタリック体とする。疑問の点は JIS などを参照する。原則として、分散分析表は含めない。 t (), F () などの書き方については、統計学辞典の凡例などを参照のこと。検定結果については、 t , F , χ^2 などの検定統計量の値、自由度、 p 値、および効果量と効果の方向を記述する。点推定値（標本平均や回帰係数など）を示す場合には、推定精度に関する情報（標準誤差など）をあわせて示す。論文中では一貫した有意水準によって信頼区間を表示することが望ましい。

資料に対して行った各種統計的検定の結果を文末で示すときには、文をカンマ (,) で区切り以下のようにつづける。

$$F(1, 10) = 6.18, p < .05; F(4, 40) = 22.71, p < .01, MSe = .005$$

$$t(22) = 6.16, p < .01$$

$$\chi^2(4, N=90) = 10.51, p < .05$$

- (2) 百分率はすべて%の記号を用いる。
- (3) 特殊な記号、たとえば Hull の理論に用いられている sHr のようなものは、特に明記し、大文字、小文字、字体、上つき、下つきなどを明確にしておく。
- (4) 欠測を伴うデータを分析する場合には、欠測の頻度や件数を示すとともに、採用した欠測発生モデルと対応方法を記述する。

3.5 単 位

計量単位は、原則として国際単位系 (SI) を用いる。ただし SI 以外の単位も編集委員会で適当と認められた場合は使用できる。

3.5.1 国際単位系

基本単位と組立単位があり、それぞれ固有の名称と記号が与えられている。基本単位、組立単位ならびにそれらに併用できることを国際度量衡委員会が認めている単位のうち、心理学に関係あるものを付録 1 (pp.69-73) に記す。

3.5.2 分量・倍量単位を表すための接頭語

基本単位、組立単位、併用単位のままでは大きすぎたり、小さすぎたりする場合、その 10 の整数倍 (10^{-24} から 10^{24} までの分量・倍量) を表す接頭語を使用できる (付録 1-4,

Table 11, p.72)。

3.5.3 単位記号の使用

- (1) 単位記号は、ローマン体を用い、一般に小文字で表すが、記号が固有名詞に由来する場合と、 10^6 以上の接頭語には大文字を用いる。本文中に、単位を文字で記す必要がある場合はカタカナを使用する。ただし、秒・分・時・日などの時間の単位、秒・分・度などの角度の単位、温度の度、ならびに立方、平方、回、については漢字を用いてもよい。
- (2) セルシウス度 (摂氏) $^{\circ}\text{C}$ 、国際単位に併用できる単位である min (分), h (時), d (日), $^{\circ}$ (度), ' (分), " (秒), および L (リットル) は使用できる。
- (3) 単位記号には、複数形やピリオド (.) を付けない。たとえば min. のようにピリオド (.) は付けず、min とする。接頭語は 1 個のみを使用し、単位記号の前にそれと一体のものとして示す。ただし、基本単位の kg のみは kg でなく、g に 1 個の接頭語が付くように接頭語を選ぶ。たとえば、1 kkg ではなく、1 Mg とし、1 m m は m の前に 2 つの接頭語が付くので避け、1 nm とする。
- (4) 単位の前にくる数値が 0.1 から 1,000 の範囲になるように接頭語を選ぶ。たとえば 2,000 kg でなく 2 Mg とし、0.00394 m でなく 3.94 mm とする。ただし、同一の表や一連の文章の中でいくつかの数値を比較するときなどは、この範囲を超えても同一の接頭語を用いたほうがよい。
- (5) 組立単位に接頭語を付ける場合は、接頭語が先頭にだけ付くようにする。たとえば 1 m/ms でなく 1 mm/s とする。
- (6) 組立単位が 2 個以上の単位の積として構成されている場合は、乗法の記号として、N · m のように点 (中黒) をはさんで表すが、誤解の恐れがなければ Nm のように点を省略してもよい。しかし、これを mN と表してはいけい。mN はミリニュートンでニュートン・メートルではない。m は、「ミリ」と「メートル」の両方を表すので特に注意する必要がある。
- (7) 組立単位が 2 個以上の単位の除算で構成されている場合は、m/s のように斜線、または、 $\text{m} \cdot \text{s}^{-1}$ のように負の指数のいずれで表してもよい。ただし、斜線を 2 個以上使用してはいけい。たとえば、 $\text{W}/\text{sr}/\text{m}^2$ とはせず、 $\text{W} \cdot \text{sr}^{-1} \cdot \text{m}^{-2}$ または $\text{W}/(\text{sr} \cdot \text{m}^2)$ とする。
- (8) 量を表す数字と単位との間には 100 m のように半角の空白をおく。またやむをえず大きな数を表示しなければならない場合は 86,400 m のように 3 桁ごとにカンマ (,) で区切る。
- (9) dB (デシベル) は SI に含まれないが、使用することができる。

3.5.4 SI に適しない例

国際単位系では不適当とみなされる例と、その正しい表し方を付録に示す (付録 1-5, Table 12, p.73)。

3.6 引用・言及

3.6.1 文献の引用

(1) 著者名・刊行年

本文中に文献を引用する場合、著者名（姓）の直後に刊行年を添える。

i) 本文中に文章として入れる場合

「宮埜（2014）によれば…」, 「Miyano（2014）は…」

ii) 括弧内に文献を示す場合

「…という（森川，2014）。」, 「…である（Morikawa, 2014）。」

iii) 同一著者で、同一年に刊行された文献がいくつかある場合、刊行年のあとにアルファベット小文字 a, b…を付して区別する。

「たとえば箱田（2014a, 2014b）では…」, 「…とする（Hakoda, 2014a, 2014b）。」

iv) 異なる著者で、同一姓、同一年の文献の引用があり、混同の恐れのある場合、日本語文献であれば第1著者の名を、外国語文献であればイニシャルを添える。

「阿部 純一（2014）では…であり、阿部 恒之（2014）では…となっている。」

「…といえる（阿部 純一，2014; 阿部 恒之，2014）。」

「本研究は，M. Matsui（2014）と Y. Matsui（2014）により…」

「…考えられる（M. Matsui, 2014; Y. Matsui, 2014）。」

(2) 自著の引用

著者自身の既刊文献の引用は、「著者は…」などとせず、「村田（2013）は…」のようにする。

(3) 共著（著者2名）

著者が2名の共著の場合は、引用のたびごとに両著者名を書く。

i) 日本語文献では、著者名の間には中黒（・）で結ぶ。

「伊東・越智（2014）は…」, 「…している（伊東・越智，2014）。」

ii) 英語文献では、“&”を用いる。

「Shimizu & Haryu（2014）によれば…」

「…確認された（Shimizu & Haryu, 2014）。」

(4) 共著（著者が3—5名）

著者が3—5名の共著の場合は、初出の際には全著者名を書く。2度目以後は、第1著者名を書き、第2著者以降は日本語文献では「他」、英語文献では“et al.”と略記する。

i) 日本語文献の初出 「堀毛・上淵・鈴木（2014）からは…」

「…であろう（堀毛・上淵・鈴木，2014）。」

日本語文献の2度目以後 「堀毛他（2014）が…」, 「…になる（堀毛他，2014）。」

ii) 英語文献の初出 「Takahashi, Ikegami, & Imura（2014）において…」

「…する（Takahashi, Ikegami, & Imura, 2014）。」

英語文献の2度目以後 「Takahashi et al.（2014）を用いて…」

「…だろう (Takahashi et al., 2014)。」

(5) 共著 (著者が6名以上)

著者が6名以上の場合は、初出の際も2度目以後も、第1著者名以外は「他」, “et al.” と略記する。3—5名の共著文献の2度目以後 (3.6.1 (4), p.31) と同じ省略表記になる場合は、刊行年のあとにアルファベット小文字 a, b…を付して区別する。

- i) 日本語文献 「浦他 (2014) については…」, 「…した (浦他, 2014)。」
- ii) 英語文献 「Oshio et al. (2014) に基づく…」, 「…論じた (Oshio et al., 2014)。」

(6) 翻訳書の引用

翻訳書を引用する場合は、原著者名とその刊行年を最初に引用し、そのあとに翻訳書の翻訳者名とその刊行年を括弧に入れる。

- i) 本文中に文章として入れる場合「Kawahara (2013 北村・越川訳 2014) では…」とし、「Kawahara (2013)」あるいは「Kawahara (2014)」とはしない。
- ii) 括弧内に文献を示す場合「…試みた (Kawahara, 2013 北村・越川訳 2014)。」

(7) 文献引用の順序

本文中の同一箇所でも複数の文献を引用するときには、文末の同じ括弧内に著者名のアルファベット順にセミコロン (;) で区切り、また同一著者については単著を優先し、刊行年順に並べてそれらをカンマ (,) で区切り示す。

「…となる (坂田, 2013; Sakata & Sakamoto, 2011; 下野他, 2012)。」

3.6.2 文章の引用

- (1) 文献の記述の一部を直接引用するときには、原文 (翻訳文) のとおり正確に転記する。
- (2) 引用文は別行とせず本文に続け、引用符 (「 」, “ ”) で囲む。
- (3) 引用文中にさらに引用句があるときには、内側に『 』, ‘ ’ を用いる。
- (4) 引用文には、末尾に著者名、刊行年、掲載ページを書き添える。

「…示された (白井, 2013, pp.150-152)。」

- (5) 原典が入手困難なために翻訳書による場合は、翻訳書の引用のしかたに従い、掲載ページを明記する。

「…がある (Tamaoka, 2012 津田訳 2013, p. 30)。」

- (6) 文章を引用する際には、著作権者の許可が必要な場合があるので注意する。
- (7) 原文の一部を省略した場合には、「…」で示す。

3.6.3 図・表の引用

- (1) 図や表について本文で言及するときは、Figure 1, Table 1 のように表記し、「下図」, 「次表」などの表現は用いない。
- (2) 他の文献の図や表を引用する場合は、その旨が明確になるように出典 (著者名、刊行年、掲載ページ、原典の図・表の番号) を括弧内に書き添える。

「Figure 1. 概念構造のモデル (Toyoda, 2013, p.120, Figure 3)。」

- (3) 図・表の引用にあたっては、著作権者の許可が必要な場合があるので注意する。

3.6.4 氏名・機関名への言及

- (1) 本文中、氏名に言及するときは、初出の際には略さずに氏名を明記し、2度目以後は姓のみを記す。外国人の場合は、ファースト・ネーム、ミドル・ネームはイニシャルでよい。ただし、引用文献の表記は前出(3.6.1 p.31)の方法による。
- (2) 氏名には、謝辞の場合を除き、敬称や肩書きを付けない。
- (3) 本文中で言及した氏名に所属機関名を書き添える必要があるときは、初出の際に氏名のあとに括弧に入れて示す。
- (4) 本文中、研究機関名に言及するときは、初出の際は略さず正式名称を明記する。2度目以後は省略表記してもよい。

3.7 表 (Table) (見本 3.1, 3.2, p.34)

3.7.1 表の原稿

(1) 表の用紙

表は1ページに1つの表を書き、引用文献(「本文中」の脚注)のあとに図とは分けて、Table 1から順におく。

(2) 表の大きさ

表の1行の文字数(横)は、日本語(全角)で25文字(半角の数字またはアルファベットの小文字で50文字)以内であれば、掲載時半ページ幅となる。全角50文字以内であれば、全幅とする。ただし、表におけるカタカナ、アルファベットの大文字、余白は全角扱いとなる。なお表の行数(縦)は、表の題、表の注、余白も含め50行が1ページに相当する。

3.7.2 表作成上の一般的注意

- (1) 表の作成にあたっては、研究結果を最も効果的に伝えることができるように工夫する。
表と図の内容の重複を避けると同時に、必要な情報は漏れなく記載されていなければならない。
- (2) 表の言語
 - i) 表は、英文アブストラクトと図表によって論文の要旨が明らかとなるよう、原則として英語とすることが望ましい。なお、表と図の言語は、論文内で英語か日本語どちらかに統一する。表の題を英語とし、表の注や表中の文字、あるいは図を日本語とするなど、英語と日本語を混在させないように注意すること。
 - ii) 英語で統一する場合で、日本語表記を添える必要があるときは、括弧内に日本語を併記する。
- (3) 原則、表の左の項目(スタブ列)は左そろえとし、表の見出しと数値は中央そろえとする。表中の主要な英単語の頭文字は大文字にする。
- (4) 数値は、有効数字を考慮して表記する。また、数字は小数点の位置、小数点以下の桁数をそろえる。
- (5) 数値の単位は、数字が縦に並ぶときはその数値に関する見出しの下、横に並ぶときは項

見本 3.1 Table 見本

見出しは中央そろえ

左項目(スタブ列)は左そろえ

項 目	因 子		
	F1	F2	F3
職場でどれだけ大変な事があったか	.75	.07	-.06
現場での些細な間違いや失敗した経験	.73	-.04	.02
現場の大まかな状況	.52	-.04	.11
職場での上司(部下)とのトラブル	.03	.84	-.04
職場での同僚とのトラブル	-.04	.81	.06
現場での悲惨な場面が思い浮かぶつらい気持ち	-.03	.03	.80
現場でのつらい体験で精神的に動揺した経験	.02	-.05	.74
現場で救助できなかった経験による心残りの話	.11	.10	.41
負荷量の平方和			
因子間相関			
2	.36		
3	.53	.48	

因子構造を強調する数値

注) F1: 職務ストレス, F2: 職場内での対人ストレス, F3: 惨事ストレス。

(兪 善英・松井 豊 (2012). 配偶者に対する消防職員のストレス開示抑制態度が精神的健康へ及ぼす影響 心理学研究, 83, p.446, Table 4. より一部変更)

見本 3.2 Table

	Body Perception ^a	DIF ^a	DDF ^a	Rumination ^b	Reflection ^b	Psychological Distress ^a
<i>M</i>	27.99	20.15	16.99	44.07	40.99	10.80
(<i>SD</i>)	(6.18)	(5.58)	(3.59)	(9.18)	(8.86)	(7.32)
Awareness when						
Standing and Walking	.38***	.07	-.03	.04	.31***	.03
Bodily Distress	-.24***	.41***	.35***	.41***	.03	.50***
Awareness of Bodily Feeling	.35***	.09	-.03	.15	.36***	.04
Actual Bodily Feeling	.46***	-.26***	-.27***	-.26***	.08	-.25***

Note. BAS = Body Awareness Scale; DIF = Difficulty Identifying Feelings; DDF = Difficulty Describing Feelings.
^a *n* = 244, ^b *n* = 133.
 ****p* < .001.

← 表の注

(Fujino, H. (2012). Effects of *Dohsa-hou* Relaxation on Body Awareness and Psychological Distress. *Japanese Psychological Research*, 54, p. 394, Table 2. より一部変更)

目の右に書き入れる。

- (6) 表中の数字が理論的に必ず1以下の場合（たとえば、相関係数）は、0を付けずに.52のように小数点以下のみを書く。
- (7) 因子構造を強調する数値は、ボールド体を用いることができる（見本3.1, p.34）。
- (8) 表中の線はできるだけ少なくし、適当にスペースをとる。縦の罫線は最小限とし、斜線は用いない。
- (9) 表について本文で言及し、挿入希望位置を本文の中に指定する。

3.7.3 表の番号、表の題

- (1) 表の番号は、論文中に示す順序に従って Table 1, Table 2 のように算用数字で通し番号を付ける。改行して表の題を付け、末尾にはピリオド（.），句点（。）を付けず、表の上部に中央そろえて表記する。
- (2) 表の題は、できるだけ簡潔にする。また表の題に用いる用語は本文と一致させる。

3.7.4 表の注

表の注は、表の題の下ではなく、表の下に以下の順におき、注の符号のあとに簡潔に記す。説明文の終わりにはピリオド（.），句点（。）を付ける。

- (1) 表全体に関する補足的説明は、表中に注の符号は付けず、“Note.”、「注）」を表の下におき、説明文を添える。
- (2) 表中の特定部分に関する注には、表中の該当箇所に注の符号（^a, ^b, ^cの上つき文字）を付け、複数ある場合は、原則改行せずに続ける。
- (3) 表における統計学上の符号の表記
“*”，“**” や “†” などの符号は、5%，1%，10%の統計上の有意水準を示すときに用い、数値の右肩に示し、表の下部にその旨を示す。複数ある場合は改行せずに続ける。

3.8 図 (Figure) (見本 3.3—3.6, p.36)

3.8.1 図の原稿

図は多くの情報を直感的に理解しやすい形で示すことができるが、かなりのスペースを要するため、厳選し、必要な図のみを、効果的に使用することが望まれる。他の図や表の内容と重複しないよう注意する。

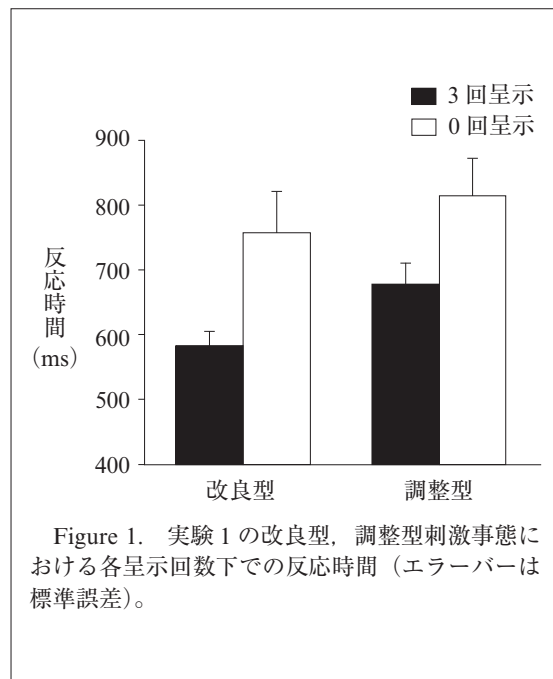
(1) 図の用紙

表と同じく、1 ページに1つの図を描き、引用文献（「本文中」の脚注）のあとに表とは分けて、Figure 1 から順におく。

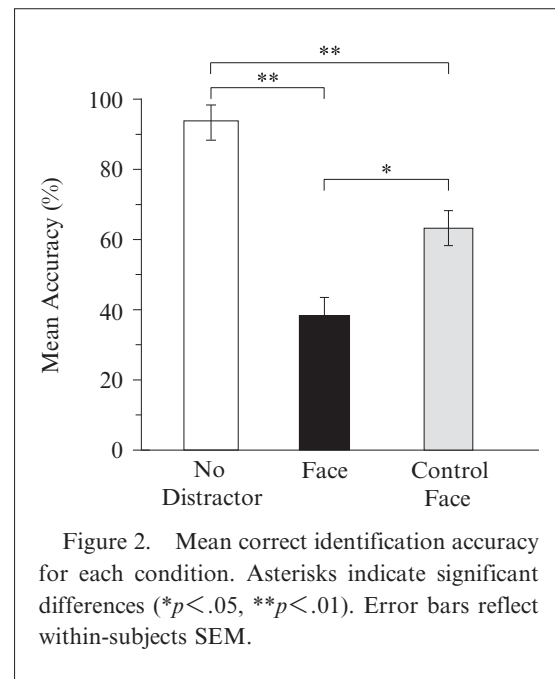
(2) 図の種類

図にはグラフ、画像、チャートなどがある。必要に応じて折れ線グラフ、棒グラフ、散布図など適切な形式を選択する。折れ線グラフは、連続的に変化する独立変数（横軸）に対応する従属変数（縦軸）の変化を示すなどの場合に利用されるのが原則である。棒グラフは、一般に独立変数が名義尺度（カテゴリー群）である場合などに利用される。散布図は、変数間の関係を示すためなどに利用される。

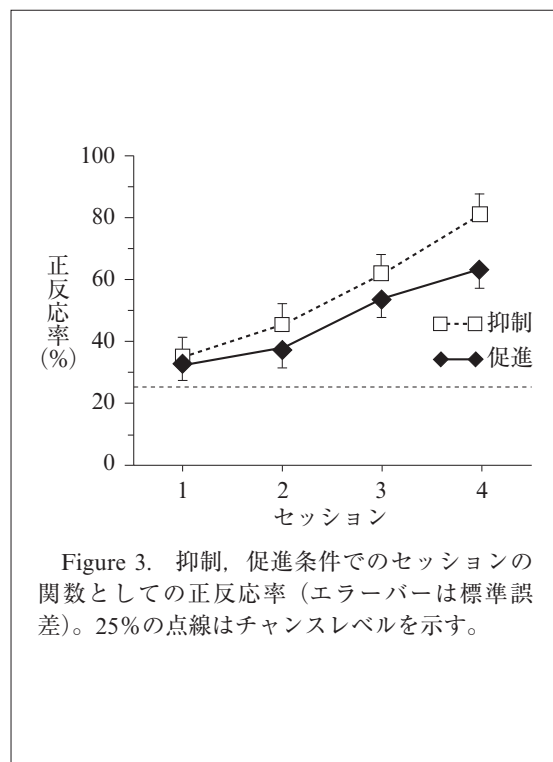
見本 3.3 Figure 見本



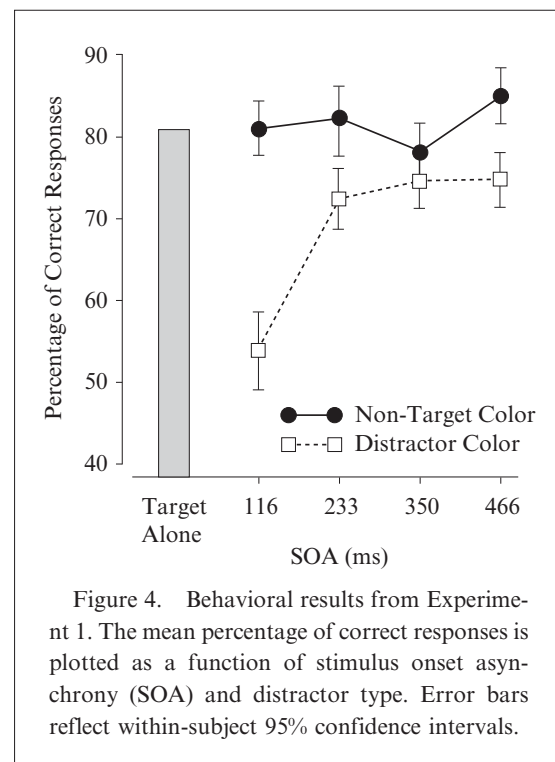
見本 3.4 Figure 見本



見本 3.5 Figure 見本



見本 3.6 Figure 見本



(3) 図の大きさ

図の中の一番小さな文字が7ポイントの大きさになるよう縮小／拡大した横幅が、7 cm 以内であれば、掲載時半ページ幅となる。14 cm 以内であれば、全幅とする。なお、図の縦は、図の題、図の注、余白も含め 21 cm が1 ページに相当する。縮尺率を考慮して、作成された図を事前に確認して投稿すること。

3.8.2 図作成上の一般的注意

(1) 作図

作図は、縮尺を考慮して線の太さを決め、コントラストに留意する。なお、図の作成にあたっては色を使用しない。図作成ソフトを使用して作図する場合、大外の枠、背景色の存在、不要な線の存在など、「心理学研究」の図の作成上の注意と異なる点が多いため、注意を必要とする。

(2) 図の言語

- i) 図は、英文アブストラクトと図表によって論文の要旨が明らかとなるよう、原則として英語とすることが望ましい。なお、図と表の言語は、論文内で英語か日本語どちらかに統一する。図の題を英語とし、図の注や図中の文字、あるいは表を日本語とするなど、英語と日本語を混在させないように注意すること。
- ii) 英語で統一する場合で、日本語表記を添える必要があるときは、括弧内に日本語を併記する。

(3) 線と点

- i) 縦軸の途中を省略する場合は、そこに波形、または斜線を入れて切り取ったことを示すとよい。
- ii) 座標軸や曲線、折れ線の太さは、論文を通じて一定にする。座標軸の太さはその図中の一番太い曲線、折れ線と同程度にする。
- iii) 同一論文の中に比較対照すべき複数の図があるときは、全部に同じ目盛りを用いる。

〈作図の際の留意事項〉

1. 必要不可欠なものを厳選する。
2. 他の表や図と内容が重複しないように注意する。
3. 必要十分な内容が記載されている必要がある。代表値に対する散布度、標本数などが重要な意味を持つ場合には、それらを図示する工夫が必要である。
4. 類似した内容の図の形式は、原則として統一する。
5. 図の題は、簡潔でかつその内容を十分に表し得るものであることが望まれる。同時にまた、他の図と異なる内容であることが容易に理解できるものでなければならない。
6. 図中の数値、その他の記号の意味は、本文を読まなくても理解できるように図中で説明されている必要がある。
7. 背景色は白にする。折れ線グラフのシンボルや棒グラフの塗りつぶしは明瞭に識別できるものを用いる。無意味な装飾（3D化、影など）を使用しない。

- iv) 折れ線のシンボルは縮小すると判別しにくくなることがあるので、大きめに描く。
 - v) データの散布度を示すためにエラーバーを用いる場合には、それが標準偏差、標準誤差、信頼区間などのどれを表すのかを明記する。
- (4) 図中の文字
- i) 図中の文字は縮尺を考慮して大きさと太さを決める。図中の英単語の頭文字は大文字とする。ただし、単位は SI（付録 1, pp.69-73）に従い、大文字か小文字かを決める。
 - ii) 座標軸の説明とその単位は各軸の外側中央に示す。縦軸は、日本語の場合は縦書きとし、英語の場合は下から上に向かって横書きで書く。
- (5) 図について本文で言及し、挿入希望位置を本文の中に指定する。
- (6) パス解析や構造方程式モデル（SEM）の結果をパス図で表示する場合には、標準的な表記を行う。以下の文献を参照のこと。

アメリカ心理学会（APA）前田 樹海・江藤 裕之・田中 建彦（訳）（2011）. APA 論文作成マニュアル 第 2 版 医学書院 p.164, 図 5.2, p.168, 図 5.6

- (7) 写真は図と同様に取り扱われる。写真と図の番号は通し番号とする。

3.8.3 図の番号、図の題

- (1) 図の番号は、論文中に示す順序に従って Figure 1., Figure 2. のように算用数字で通し番号を付ける。改行せず図の題を続け、末尾にはピリオド（.），句点（。）を付ける。
- (2) 図の下に、図の番号および図の題を左そろえて記す。
- (3) 図の題は、できるだけ簡潔にする。また図の題に用いる用語は本文と一致させる。

3.8.4 図の注

図の注は、図の題の下に以下の順におき、注の符号のあとに簡潔に記す。説明文の終わりにはピリオド（.），句点（。）を付ける。

- (1) 図全体に関する補足的説明は、図中に注の符号は付けず、“*Note.*”，「注」を図の題の下におき説明文を添える。
- (2) 図中の特定部分に関する注には、図中の該当箇所に注の符号（^a, ^b, ^cの上つき文字）を付け、複数ある場合は、原則改行せず続ける。
- (3) 図における統計学上の符号の表記

“*”，“**” や “†” などの符号は、5%，1%，10%の統計上の有意水準を示すときに用い、数値の右肩に示し、図の下部にその旨を示す。複数ある場合は改行せずに続ける。

3.9 引用文献（見本 3.7, p.40）

引用文献は本文の次に一括して示す。見出しは「引用文献」（展望論文では「文献」とし、中央大見出しとする。読者が検索、参照できるように留意すること。DOI（Digital Object Identifier）を含めることを推奨するが必須ではない。

3.9.1 文献を引用する場合の一般的注意

- (1) 表記が 2 行以上にわたる場合は、2 行目以降を全角 2 文字（半角 4 文字）分字下げする。
- (2) 日本語文献と外国語文献を分けず、著者名（姓）のアルファベット順とし、文献番号は

付けない。

(3) 刊行年

- i) 文献の刊行年は、すべて刊行された西暦年を用いる。
- ii) 刊行年には () を付ける。
- iii) 2年または3年に1巻を逐次刊行される場合は、(2011-2013) のように2つの年を2分ダッシュ (-) で結んで示す。
- iv) 「心理学研究」のように1年1巻ではあるが、4月から翌年3月までの年度による場合には、掲載号の刊行年による。

(4) 文献の表題は副題も含めて略さずに書く。日本語文献では、副題を2倍ダッシュ (——) ではさむ。外国語文献では、原則として表題と副題の最初の語の頭文字、固有名詞、ドイツ語の名詞のみ大文字とし、副題はコロン (:) のあとに続ける。

(5) 逐次刊行物の誌名は、原則として正式名称を、省略せず記載する。類似の紛らわしい、あるいは全く同一の名称の場合は、誌名のあとに、刊行主体（あるいは刊行地）を括弧に入れて明示する。

“*J Cog Neurosci*”ではなく“*Journal of Cognitive Neuroscience*”

(6) 原則として間接引用はしない。また投稿中、査読中で、印刷刊行されることが確定していない論文の引用は原則できない。

3.9.2 外国語文献の表記の仕方

(1) 著者名

i) 一般的書き方

著者名は、姓を先に書き、カンマ (,) をおき、ファースト・ネーム、ミドル・ネームのイニシャルの順で書く。イニシャルのあとにはピリオド (.) を付ける。もし同姓で、イニシャルも同じ著者があるときは、名も略さずに書く。著者名の表記法は、原著者のそれに従う。

Sato, T. (2013)., Sato, Takao (2013)., Sato, Tatsuya (2013).

ii) 共著（著者が7名以下）

すべての著者を書き、最後の著者の前にカンマ (,) と&をおく。and と綴らぬこと。

Saiki, J., Nakazawa, J., & Sugimura, K. (2013).

iii) 共著（著者が8名以上）

著者が8名以上の場合は、第1から第6著者まで書き、途中の著者は“...”で省略表記し、最後の著者を書く。

Kawai, N., Kudo, E., Saito, S., Sakurai, K., Sugawara, K., Takemura, K., ...Negayama, K. (2014).

(2) 書籍

書籍の場合は、著者名、刊行年、書籍名、初版以外は版数、出版地、出版社を書く。書籍名はイタリック体とする。

見本 3.7 引用文献例

引用文献	外国語文献
Blechman, E. A. (1990). <i>Emotions and family: For better or for worse</i> . New York: Lawrence Erlbaum Associates. (ブレックマン, E. A. 濱 治世・松山 義則 (監訳) (1998). 家族の感情心理学——そのよいときも, わるいときも—— 北大路書房)	翻訳書
Duchenne de Boulongne, G. B. (1990). <i>The mechanism of human facial expression</i> (R. A. Cuthbertson, Ed. & Trans.). Cambridge: Cambridge University Press. (Original work published 1862)	外国語での翻訳書
Ekman, P. (1965). Differential communication of affect by head and body cues. <i>Journal of Personality and Social Psychology</i> , 2, 726-735.	同一著者
Ekman, P. (1992). An argument for basic emotions. <i>Cognition and Emotion</i> , 6, 169-200.	
Ekman, P., Davidson, R. J., & Friesen, W. V. (1990). The Duchenne smile: Emotional expression and brain physiology II. <i>Journal of Personality and Social Psychology</i> , 58, 342-353.	雑誌
Ekman, P., & Friesen, W. V. (1969a). Nonverbal leakage and clues to deception. <i>Psychiatry</i> , 32, 88-106.	同一年 (a, b)
Ekman, P., & Friesen, W. V. (1969b). The repertoire of nonverbal behavior: Categories, origins, usage, and coding. <i>Semiotica</i> , 1, 49-98.	
Ekman, P., & Friesen, W. V. (1978). <i>Facial action coding system: A technique for the measurement of facial movement</i> . Palo Alto, CA: Consulting Psychologists Press.	書籍
Ekman, P., Friesen, W. V., & Ellsworth, P. (1982). Conceptual ambiguities. In P. Ekman (Ed.), <i>Emotion in human face</i> (2nd ed., pp. 98-110). Cambridge: Cambridge University Press.	特定章
深谷 達史 (2011a). 科学的概念の学習における自己説明プロンプトの効果——SBF理論に基づく介入—— 認知科学, 18, 190-201.	日本語文献
深谷 達史 (2011b). 学習内容の説明が文章表象とモニタリングに及ぼす影響 心理学評論, 54, 179-196.	同一年 (a, b)
古賀 愛人・岸本 陽一・寺崎 正治 (1992). 多面的感情状態尺度 (短縮版) の妥当性 日本心理学会第 56 回大会発表論文集, 646.	大会発表
三浦 麻子・小森 政嗣・松村 真宏・前田 和甫 (2015). 東日本大震災時のネガティブ感情反応表出——大規模データによる検討—— 心理学研究 Advance online publication. doi.org/10.4992/jjpsy.86.13076	早期公開, doi 表記
小川 時洋・門地 里絵・菊谷 麻美・鈴木 直人 (2000). 一般感情尺度の作成 心理学研究, 71, 241-246.	雑誌
越智 啓太 (2013). ケースで学ぶ犯罪心理学 北大路書房	書籍
坂野 雄二・福井 知美・熊野 宏昭・堀江 はるみ・川原 健資・山本 晴義…末松 弘行 (1994). 新しい気分調査票の開発とその信頼性・妥当性の検討 心身医学, 34, 629-636.	著者 8 名以上
角辻 豊 (1978). 情動の表出 金子 仁郎・菱川 泰夫・志水 彰 (編) 精神生理学Ⅳ 情動の生理学 (pp. 196-209) 金原出版	特定章

- i) 一般的な例
(著者名), (刊行年), (書籍名), (出版地: 出版社)
Rosen, L. D., Cheever, N., & Carrier, L. M. (2015). *The Wiley Blackwell handbook of psychology, technology and society*. UK: Wiley.
- ii) 新版: 初版以外は必ず版数を明記しておく。版 (edition) は ed. と省略表記する。
(著者名), (刊行年), (書籍名) (版数), (出版地: 出版社)
American Psychiatric Association (2013). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders* (5th ed.). Washington, DC: American Psychiatric Association.
- iii) 編集書: 編集者 (editor) は Ed. と省略表記し, 編集者が複数のときは Eds. と省略表記する。
(編集者名) (Ed., Eds.), (刊行年), (書籍名), (出版地: 出版社)
Osaka, N., Rentschler, I., & Biederman, I. (Eds.). (2007). *Object recognition, attention, and action*. Tokyo: Springer.
- iv) 編集書中の特定章
(著者名), (刊行年), (表題), In (編集者名) (Ed., Eds.), (書籍名) (引用ページ), (出版地: 出版社)
Sato, T. (1998). D_{max}: Relations to low- and high-level motion processes. In T. Watanabe (Ed.), *High-level motion processing* (pp. 115-152). Cambridge, MA: MIT Press.
- v) 数巻にわたる書籍
(著者名), (刊行年), (書籍名) (Vols. 巻数), (出版地: 出版社)
Freud, S. (1956-1974). *Standard editions of complete psychological works of Sigmund Freud* (Vols. 1-24). London: Hogarth Press.
- vi) 数巻にわたる書籍の特定の1巻
(著者名), (刊行年), (書籍名), (シリーズ名, 巻数など), (出版地: 出版社)
Lamb, M. E. (Ed.). (2015). *Socioemotional processes*. (R. M. Lerner, Series Ed.) *Handbook of child psychology and developmental science*. Vol. 3. USA: Wiley.
- vii) 翻訳書
(原著者名), (翻訳書刊行年), (翻訳書籍名) (翻訳者名, Trans.), (翻訳書出版地: 出版社), (Original work published 原書刊行年など)
Helmholtz, H. von (1925). *Treaties on physiological optics* (Vol. 3, J. P. C. Southall, Ed. & Trans.). New York: Optical Society of America. (Original work published 1910)
- viii) 再版
(著者名), (再版刊行年), (書籍名), (出版地: 出版社), (Original work published 初版刊行年など)
Adler, A. (1970). *The education of children*. Indiana: Gateway. (Original work published 1930, London: George Allen & Unwin)
- (3) 逐次刊行物 (学術誌を含む雑誌, 年報, 紀要など)

逐次刊行物の場合は、著者名、刊行年、表題、誌名、巻数、ページを書く。誌名、巻数をイタリック体、引用文献の最初と最後のページを2分ダッシュ（-）をはさんで記す。誌名の主要語の頭文字は大文字とし、慣例により The は省略する。

i) 各巻通しページ付き論文

(著者名), (刊行年), (表題), (誌名), (巻数), (引用ページ)

Matsunaga, R., Yokosawa, K., & Abe, J. (2014). Functional modulations in brain activity for the first and second music: A comparison of high- and low-proficiency bimusicals. *Neuropsychologia*, 54, 1-10.

ii) 各巻通しページなし論文

各号ごとに独立したページが付され、1巻を通してのページ付けがない論文の場合は、巻数の直後に号数を括弧内に入れて記す。

(著者名), (刊行年), (表題), (誌名), (巻数) (号数), (引用ページ)

Kawahara, J., Yanase, K., & Kitazaki, M. (2012). Attentional capture by the onset and offset of motion signals outside the spatial focus of attention. *Journal of Vision*, 12 (12), 1-13.

iii) モノグラフ、シリーズ通し番号付き

(著者名), (刊行年), (表題), (シリーズ名), (号数)

Sperling, G. (1960). The information available in brief visual presentations. *Psychological Monographs: General and Applied*, No. 498.

iv) 年報・年鑑、紀要

(著者名), (刊行年), (表題), (誌名), (巻数, 号数), (引用ページ)

Pian, C., Yamamoto, T., Takahashi, N., Oh, S.-A., Takeo, K., & Sato, T. (2006). Understanding children's cognition about pocket money from mutual-subjectivity perspective. *Memoirs of Osaka Kyoiku University, IV, Education, Pshychology, Special Support Education and Physical Education*, 55, 109-127.

(4) オンライン資料の引用

i) 刊行された冊子体がある場合には、冊子体を引用文献として記載する。

ii) 刊行されることが確定し、刊行までの間、オンラインで早期公開 (Early View) されている場合、刊行年の表記は (公開年) とし、早期公開である旨と DOI を明記する。刊行されたあとは、冊子体の表記に差し替える。

(著者名), (公開年), (表題), (誌名), (Advance online publication. doi:xxx)

Roelofs, A. (2014). Modeling of phonological encoding in spoken word production: From Germanic languages to Mandarin Chinese and Japanese. *Japanese Psychological Research*. Advance online publication. doi: 10.1111/jpr.12050

iii) オンライン上でのみしか閲覧できない資料で、DOI がある場合は、DOI を記載する。

(著者名), (刊行, 公開年), (表題), (掲載名称), (doi: xxx)

Kawai, N., Miyata, H., Nishimura, R., & Okanoya, K. (2013). Shadows alter facial

expressions of Noh Masks. *PLoS ONE*, 8(8), e71389. doi: 10.1371/journal.pone.0071389

- iv) オンライン上でのみしか閲覧できない資料で、DOI がない場合は、次の書式で記載する。

(著者名), (公開年), (表題), (ウェブサイト名), (Retrieved from URL), (アクセス年月日)

American Psychological Association. (2014). Quick Links: APA Style. American Psychological Association. Retrieved from <http://www.apa.org/learn/index.aspx> (December 3, 2014.)

ただし, iii), iv) の場合, オンラインからの削除が予想されるので, 編集委員会からの請求があった場合, 速やかに対応できるようにする。

(5) その他

i) 学位論文など

学位論文などの年次は年度によらず, 修了, 授与の年をもって示す。また抄録などが公刊されている場合は, それによる。

(著者名), (修了, 授与年), (表題) (Unpublished master's thesis, doctoral dissertation), (大学名, 所在地)

Li, Q.(2011). *Feature-based versus space-based access to internal representations in visual working memory* (Unpublished master's thesis). Kyoto University, Kyoto.

ii) 学会などでの発表

(著者名), (刊行, 発表年), (表題), (誌名, 大会名), (引用ページ)

Higuchi, Y., & Saiki, J. (2014). Contextual cueing effect without eye movements. *Paper Presented at Vision Sciences Society the 14th Annual Meeting* (Florida, USA), 16-21.

iii) 印刷中の論文

刊行されることが確定してはいるが未刊行の場合, 刊行年の代わりに“(in press)”と明記する。

(著者名), (in press), (表題), (誌名)

O'Séaghdha P. G. (in press). Across the great divide: Proximate units at the lexical-phonological interface. *Japanese Psychological Research*.

iv) 新聞記事および雑誌記事の引用

新聞記事および雑誌の記事を引用する場合は, 執筆者(分からなければ掲載紙(誌)名), 発行年, 資料表題, 掲載紙(誌)名, 発行日(朝刊・夕刊), 掲載ページの順で記載する。

Uematsu, K. (2015). Kids learn about life by raising animals at school. *Japan News*, March 13, 16.

3.9.3 日本語文献の表記の仕方

(1) 著者名

- i) 著者名は、姓、名の順に書き、姓と名の間にはカンマ（,）をつけず半角あける。著者名の後にはピリオド（.）は付けない。
今水 寛（2014）.
- ii) 共著（著者が7名以下）の場合には、各著者の間に中黒（・）を入れて結ぶ。
大平 英樹・小西 啓史（2014）.
- iii) 共著（著者が8名以上）の場合には、第1から第6著者まで書き、途中の著者は「…」で省略表記し、最後の著者を書く。
坂上 貴之・下斗米 淳・服部 雅史・三浦 佳世・村上 郁也・やまだ ようこ…鈴木 直人（2014）.
- iv) 政府・官公庁・研究機関・学協会組織・一般民間組織など団体名義の著作物は、正式の名称を略さずに書き、個人著者名の場合と同様に、アルファベット順に並べる。
- v) 著者名がない文献の場合は、表題によってアルファベット順に入れる。

(2) 書籍

書籍の場合は、著者名、刊行年、書籍名、出版社を書く。

- i) 一般的な例
(著者名), (刊行年), (書籍名), (出版社)
宮埜 寿夫（1993）. 心理学のためのデータ解析法 培風館
- ii) 新・改訂版（増刷に際し、内容がそのままならば版数の記載は不要）
(著者名), (刊行年), (書籍名), (版数), (出版社)
松井 豊（2010）. 心理学論文の書き方——卒業論文や修士論文を書くために—— 改訂新版 河出書房新社
- iii) 編集書・監修書
(著者名) (編, 監修), (刊行年), (書籍名), (出版社)
藤永 保（監修）（2013）. 最新心理学事典 平凡社
- iv) 編集書・監修書の特定章
(著者名), (刊行年), (表題), (編集者名) (編, 監修), (書籍名), (引用ページ), (出版社)
坂本 真士（2013）. 論文投稿に向けて 坂本 真士・大平 英樹（編） 心理学論文道場——基礎から始める英語論文執筆——（pp.16-50） 世界思想社
- v) 数巻にわたる書籍（主題を持つ叢書・集書等を含む）
(著者名), (刊行年), (書籍名), (総巻数), (出版社)
本明 寛・依田 明・福島 章・安香 宏・原野 広太郎・星野 命（編）（1989-1990）. 性格心理学新講座（全6巻） 金子書房
- vi) 数巻にわたる書籍の特定の1巻
(著者名), (刊行年), (書籍名), (監修者名, シリーズ名, 巻数など), (出版社)
箱田 裕司（編）（2012）. 認知 大山 正（監修） 心理学研究法2 誠信書房
- vii) 翻訳書

(原著者名), (原書籍刊行年), (原書籍名), (原書籍出版地: 出版社)

((原著者名カタカナ表記) (翻訳者名) (訳), (翻訳書刊行年), (翻訳書籍名),
(翻訳書出版社))

Roesn, N. J. (2005). *If only: How to turn regret into opportunity*. New York: Broadway.

(ローズ, N. J. 村田 光二 (監訳) (2008). 後悔を好機に変える——イフ・オンリーの心理学—— ナカニシヤ出版)

viii) 再版

(著者名), (再版刊行年), (書籍名), (出版社), (再版表示, 初版刊行年)

市川 伸一 (2012). 開かれた学びへの出発——21世紀の学校の役割—— 子どもの発達と教育 6 金子書房 (オンデマンド版, 1998)

ix) 著 (編集・監修) 者 (個人または団体) 自身が刊行者である場合 (自費出版など) には, 一般的な書籍の例に準じて記載し, 出版社の部分を (自費出版) と書けばよい。

(3) 逐次刊行物 (学術誌を含む雑誌, 年報, 紀要など)

逐次刊行物の場合は, 著者名, 刊行年, 表題, 誌名, 巻数, ページを書く。巻数をイタリック体, 引用文献の最初と最後のページを2分ダッシュ (–) をはさんで記す。

i) 各巻通しページ付き論文

(著者名), (刊行年), (表題), (誌名), (巻数), (引用ページ)

中沢 潤・国本 小百合・祐宗 省三 (1978). 幼児の弁別学習——非次元性課題における過剰訓練効果—— 心理学研究, 49, 131-136.

ii) 各巻通しページなし論文

各号ごとに独立したページが付され, 1巻を通してのページ付けがない論文の場合は, 巻数の直後に号数を括弧内に入れて記す。

(著者名), (刊行年), (表題), (誌名), (巻数) (号数), (引用ページ)

津田 彰・永富 香織・田中 芳幸・岡村 尚昌・矢島 潤平・津田 茂子 (2005). 日本と英国の大学生における健康行動と健康リスク意識 健康心理学研究, 18(2), 1-15.

iii) 年間2冊またはそれ以上を刊行するが, 巻数がなくて通し番号になっている場合 (号, 輯, 集など)

(著者名), (刊行年), (表題), (誌名, シリーズ名), (号数), (引用ページ)

森川 和則 (2010). 知覚心理学は右肩下がりか, 右肩上がりか——38年間のトレンド—— 心理学ワールド, No.51, 5-8.

iv) 年報・年鑑

各年次ごとに巻・号・輯など番号付けしてあるものは, 上の例に準ずる。単に年次のみを示してあるものについては, 刊行年と一致する場合には, 刊行年のみでよい。

刊行年と表題の年次が異なる場合 (たとえば, 2013年版で, 2012年中に刊行された場合など) には, iii) の例で号数を示している部分に, 2013年版 などのように記す。

(著者名), (刊行年), (表題), (誌名), (出版社)

内閣府（2014）．平成 26 年度版防災白書 日経印刷

v) 紀要, その他

紀要, 報告書の名称が同一で, いくつかの部門, シリーズに分かれているものには, 表題の直後に続けて, その部門やシリーズの名称を記す。なお, 紀要, 報告等の名称に, その大学などの名称が含まれていない場合は括弧に入れて記す。

(著者名), (刊行年), (表題), (誌名), (巻数, 号数), (引用ページ)

姜 露・針生 悦子 (2009)．自動詞・他動詞構文の理解の発達——中国語を母語とする子どもの場合—— 東京大学大学院教育学研究科紀要, 49, 207-215.

(4) オンライン資料の引用

i) 刊行された冊子体がある場合には, 冊子体を文献として記載する。

ii) 刊行されることが確定し, 刊行までの間, オンラインで早期公開されている場合, 刊行年の表記は (公開年) とし, 早期公開である旨と DOI を明記する。刊行されたあとは, 冊子体の表記に差し替える。

(著者名), (公開年), (表題), (誌名), (Advance online publication. doi:xxx)

高橋 登・中村 知靖 (2015)．漢字の書字に必要な能力—— ATLAN 書取り検査の開発から—— 心理学研究 Advance online publication. doi.org/10.4992/jjpsy.86.14210

iii) オンライン上でのみしか閲覧できない資料で, DOI がある場合は, DOI を記載する。

(著者名), (刊行, 公開年), (表題), (掲載名称), (doi: xxx)

有賀 美恵子 (2013)．高校生における登校回避感情の関連要因 日本看護科学会誌, 33(1), 12-24. doi.org/10.5630/jans.33.1_12

iv) オンライン上でのみしか閲覧できない資料で, DOI がない場合は, 次の書式で記載する。

(著者名), (公開年), (表題), (ウェブサイト名), (Retrieved from URL), (アクセス年月日)

公益社団法人日本心理学会 (2014)．論文を投稿される方 公益社団法人日本心理学会 Retrieved from <http://www.psych.or.jp/publication/paper.html#ronbun01> (2014 年 12 月 3 日)

ただし, iii), iv) の場合, オンラインからの削除が予想されるので, 編集委員会からの請求があった場合, 速やかに対応できるようにする。

(5) その他

i) 学位論文など

学位論文などの年次は年度によらず, 修了, 授与の年をもって示す。また抄録などが公刊されている場合は, それによる。

(著者名), (修了, 授与年), (表題), (大学名) (修士, 博士論文) (未公刊)

小野 史典 (2003)．文脈手がかりの獲得に及ぼす視覚的印付けの効果 広島大学教育学研究科修士論文 (未公刊)

ii) 学会などでの発表

予稿集と抄録などがある場合、より詳細な掲載誌を記す。

(著者名), (刊行, 発表年), (表題), (誌名, 大会名), (引用ページ)

齋木 潤 (2010). 視覚性ワーキングメモリの動的更新と特徴統合 日本心理学会第 74 回大会発表論文集, ITL (1).

iii) 印刷中の論文

刊行されることが確定してはいるが未刊行の場合、刊行年の代わりに (印刷中) と明記する。

(著者名), (印刷中), (表題), (誌名)

中山 真孝・齊藤 智 (印刷中). 言い間違い誘導法を用いた音韻計画過程の検討 心理学研究

iv) 新聞記事および雑誌記事の引用

新聞記事および雑誌の記事を引用する場合は、執筆者 (分からなければ掲載紙 (誌) 名), 発行年, 資料表題, 掲載紙 (誌) 名, 発行日 (朝刊・夕刊), 掲載ページの順で記載する。

サトウ タツヤ (2013). ちょっとココロ学——悩み事 どうやって打開? —— 読売新聞 7月8日夕刊, 7.

3.9.4 引用文献の記載順序

- (1) 引用文献は、日本語文献と外国語文献を分けず、共著の場合も、第1著者の姓のアルファベット順に配列することを原則とする。同姓の者が複数いる場合には、名のアルファベット順による。
- (2) 同一著者が、単独で発表している文献と、その著者が第1著者として名を連ねている共著の文献がある場合には、単著を先にし、次に共著を並べる。また、第1著者が同一で、第2著者が異なるときは、刊行年ではなく、第2著者の姓のアルファベット順にそれらを並べる。第3著者以降も同様である。

Haga, S. (2013).

Haga, S., Fujita, K., & Murohashi, H. (2012).

Haga, S., & Murohashi, H. (2011).

- (3) 同一著者の、あるいは同一配列の共著の文献がいくつかある場合には、早い刊行年のものから順に並べる。同一年に刊行された文献がいくつかある、あるいは、本文への引用の際の省略表記が同一となる場合、刊行年のあとに、アルファベット小文字 a, b…を付して区別する。

Yoshino, R. (2013a).

Yoshino, R. (2013b).

- (4) 冠詞や前置詞

冠詞や前置詞 (de, la, du, von, van der, della など) を含む著者名については、それぞれの言語によって規則があるから、それに従ってアルファベットの位置を定める。

西洋人名辞典や抄録雑誌の人名索引などで調べるとよいが、一般に著者が、これらの語を大文字で始めているときは、それによってアルファベット順に記し、小文字で始めているときは、無視して配列する（たとえば、Le Bras は“L”により、von Helmholtz は“v”ではなく、“H”によって配列する）。

3.10 英文アブストラクトとキーワード

3.10.1 英文アブストラクト

- (1) 100—175 語の英文アブストラクトならびにその日本語訳を添付する。英文アブストラクトには問題（目的）、方法、結果、考察または結論を含める。
- (2) 英文については、ネイティブの専門家の、責任ある校閲を経た文章であることが不可欠である（なお、査読を終了し掲載の決定した論文の英文アブストラクトなどは、事務局編集部において英文校閲業者に依頼し、校閲を行う）。
- (3) 英文アブストラクトの日本語訳は、英文校閲の際に参考にするから、直訳ではなく、著者の意図を平易な日本語で述べたものとする。
- (4) 数は算用数字で示す。ただし、10 未満の数および文頭では文字で綴る。

3.10.2 キーワード

英文アブストラクトの下にその論文の分類、検索などのための、その論文を特徴づける英語のキーワードを 3—5 項目つける。検索の便のため、次の基準に従う。

- (1) キーワードは名詞または名詞句であり、複数形をとり得るもの（countable noun）は複数形で示す。

（例）theory — theories, mouse — mice, child — children

- (2) 原則として略語は使わない。
- (3) 英文アブストラクトまたは本文中と異なった語を用いてもよい。

（例）hyperactivity — hyperkinesis, quantification — measurement

- (4) 固有名詞（氏名、地名、テスト名など）もキーワードになり得る。なお固有名詞などのように大文字を使う必然性がある場合以外はすべて小文字で書く。

（例）Freud (Sigmund), Wechsler Adult Intelligence Scale

〈キーワードの設定はその後の引用に影響する〉

キーワードは論文の内容を表すものでなければならないことは当然だが、同時に他の研究者から検索されやすいものでなければならない。いかに内容を的確に表すものであっても、キーワードとして一般的でない用語を設定したのでは、他の研究者から検索される機会がなく、したがって引用されることもない。

そのためには、自ら設定したキーワードを用いて PsycINFO（APA）などのデータベースにおいて検索してみるというのも一つの方法であり、そのキーワードで文献がほとんど検索されなければ、そのキーワードは避けるべきである。

また、日本心理学会編集委員会刊行の、“*Japanese Psychological Research*” 50 周年記念号（Vol. 51, No. S1, 2009）のキーワードを調べてみると参考になる。

自分の論文を他の研究者に知ってもらう上で、キーワードの設定は慎重に行うこと。

第4章 “*Japanese Psychological Research*” の 投稿原稿の作り方

本章では，“*Japanese Psychological Research*”へ論文を投稿する際に、守らなくてはならない一般的な約束が述べられている。投稿論文（投稿原稿）を作成するために必要な事柄を、実際の電子投稿システムの入力画面とは異なるが、掲載される学術論文の形式にあわせて説明している。

4.1 論文の種類、形式と長さ

4.1.1 論文の種類と定義

- (1) Original Article：原則として、問題提起と実験、調査、事例などに基づく研究成果、理論的考察と明確な結論をそなえた研究。新たな実験装置や解析プログラムの開発、新たな心理測定尺度の作成やデータベースの構築など、研究の遂行に有用な新たな方法、技術およびデータに関する報告も含む。掲載時 12 ページ以内。
- (2) Review：心理学の最近の重要テーマについて、研究状況、主要成果、問題点等を解説し、研究の意義と今後の課題を論じる。編集委員会から執筆依頼を行う“Invited Review”を含む。掲載時 24 ページ以内。

4.1.2 論文の形式

論文は英語とし、投稿原稿は A4 判の白紙を縦置きにして使用する。各ページは、上下、左右に 3 cm 以上の余白を取り、一般的フォント（見やすいもの）および 10.5 ポイント以上のサイズの文字を使用し、行間はダブルスペースとする。1 ページに入る行数はフォント、サイズにより異なるが、20—23 行を目安とする（見本 2.4, p.17）。原稿には通しページを付ける。なお英語については、ネイティブの専門家の責任ある校閲を経た文章であることが不可欠である。

4.1.3 論文の長さ

論文の長さは、表題、著者名、所属機関名、英文アブストラクトとキーワード、本文、引用文献、脚注、図表、付録などすべてを含め、論文種類ごとの規定ページ内におさめる必要がある。論文の掲載時の長さは、以下のように見積る。

- (1) 表題部分（表題、著者名、所属機関名、英文アブストラクトとキーワード、英文連絡先、「表題ページ」の脚注）は掲載時約半ページと見積る（著者が 5 名以上の場合は 2/3 ページ）。
- (2) 本文は約 700 語で掲載時 1 ページに相当する。
- (3) 引用文献は 27 文献で掲載時 1 ページに相当する。

- (4) 表は横半角 80 文字×縦 49 行で掲載時 1 ページに相当し、40 文字×49 行で半ページに相当する。
- (5) 図は図中の一番小さな文字が 7 ポイントの大きさになるよう縮小／拡大し、横 13 cm×縦 20 cm で掲載時 1 ページに相当する。片段は 6.5 cm×20 cm で半ページに相当する。

4.2 論文情報

4.2.1 表題

表題は、論文の内容に即したものとし、長さは、12—15 語程度とする。副題は、できるだけ避ける。一連の研究の場合でも、番号の異なる同一表題は好ましくない。やむをえずそうする場合は副題としてそれを用い、主題は別に付ける。副題は主題の後にコロン（:）をつけて続ける。主要語の頭文字は大文字にする（3 文字以下の接続詞、冠詞、前置詞は小文字）。

4.2.2 著者名

著者名は省略せず、ローマ字（英語、原語）で名（ファースト・ネーム）、姓（ファミリー・ネーム）の順で表記する。著者が、改姓（名）をした場合は、括弧内に併記するのではなく、脚注として旧姓（名）を明示することが望ましい。

連名者は、その論文の内容に責任を持つ協力者に限られ（単なる補助者、部分的協力者は、連名者とはせず、必要があれば「表題ページ」の脚注において謝辞を述べる）、研究貢献度に従って順に並べることを原則とする。

4.2.3 所属機関名

- (1) 所属機関名は英語の正式名称を、すべての著者について記す。所属機関名は、部局などは記載しない。たとえば大学の場合、大学名のみを掲載し、学部、学科、専攻などは必要があれば「表題ページ」の脚注として付記する。
- (2) 著者の所属機関が、投稿時から変わった場合、あるいは研究を行った機関が、現所属機関とは異なる場合は、「表題ページ」の脚注にその旨を記す。
- (3) 非常勤の勤務先を所属機関として掲載する場合は、当該機関の承諾を必要とする。

4.2.4 「表題ページ」の脚注

「表題ページ」の脚注は、掲載時、表題ページの欄外に印刷される。脚注を付ける場合、該当箇所の右肩に上つき数字（¹, ², ³）、通し番号で脚注番号を付ける。「表題ページ」の脚注で示す例をあげる。

- (1) 文部科学省、日本学術振興会などの科学研究費補助金などによる研究の発表である場合、利益相反について、大会で発表している場合など、研究についての補足は、表題（主題）に脚注番号を付ける。

¹This study was supported by Grant-Aid for Scientific Research, Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, xxx from Japan Society for the Promotion of Science.

² Experiment 2 was presented at the 77th Annual Convention of the Japanese

Psychological Association.

- (2) 謝辞を述べたい場合、第1著者名に脚注番号を付ける。
- (3) 著者が改姓（名）をした場合や、所属機関については、該当の著者名に脚注番号を付ける。
- (4) 論文に関する連絡先は、掲載時の英文連絡先とし、共著の場合は、その論文に関して責任をもって対応できる者の、著者名、所属機関名、住所、メールアドレスを次の要領で示す。

(著者名), (部局), (所属機関名), (町, 区, 市), (都道府県) (郵便番号), (国名),
(メールアドレス)

Correspondence concerning this article should be sent to: Taro Shinri, Department of Psychology, Faculty of Letters, xxx University, Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo 113-xxxx, Japan. (E-mail: xxx@xxx)

4.3 本文

4.3.1 見出し（見本 2.4, p.17）

本文での見出しは、以下の3種類のみ用いられる。見出しには番号を付けない。

- (1) 中央大見出し：行の中央にゴシック、ボールド体で、ピリオド（.）を付けない。その上下は1行あける。主要単語の頭文字は大文字にする。
- (2) 横大見出し：行の左端から、ゴシック、ボールド体で、ピリオド（.）を付けない。本文は改行して始める。主要単語の頭文字は大文字にする。
- (3) 横小見出し：行の左端から2文字あけ、ゴシック、ボールド体で、ピリオド（.）を付ける。本文は、同行に2文字あけて続ける。第1語の頭文字は大文字にする。

4.3.2 段落・見出し以外の序列

内容のまとまりごとに段落をつける。段落ごとに改行し、左端から2文字分下げする。

- (1) 段落に序列をつける

関連性のある内容の段落に序列をつける場合は、算用数字で番号を付け、文章で簡潔に表現し、順次改行して用いる。コロン（:）やスペースを入れるなど、見出し扱いにはできない。

1. ...
2. ...
3. ...

- (2) 段落内で序列をつける

文章中、または段落内で序列をつける場合には、(a)..., (b)..., (c)..., のようにアルファベットに括弧を付け、改行せずに文章を続けていく。コロン（:）やスペースを入れるなど、見出し扱いにはできず、(1), 1), ①, a) などは使用できない。

4.3.3 「本文中」の脚注

「本文中」の脚注は、論旨を進めていく上で参考になることや、本文中に入れると混乱

を招くような事柄の補足的説明に用い、最小限にとどめる。

- (1) 掲載時、該当ページの欄外に印刷される。
- (2) 「表題ページ」の脚注から続く通し番号を、該当箇所の句読点のあとの右肩に上つき数字^(1, 2, 3)で付ける。見出しには付けない。
- (3) 脚注文は、原稿の引用文献の次のページにまとめて記す。
- (4) 著作権に関する注釈は、必要であれば「本文中」の脚注に記載する。
- (5) 抄録が公刊されていない場合、また書簡、私的な小集会での発表、発言、非公式の意見交換などは私信 (Personal communication, 年月) として扱い、引用文献ではなく「本文中」の脚注に記す。

4.3.4 句読法

- (1) 句点 (.) と読点 (,)
句点はピリオド (.), 読点はカンマ (,) を用いる。
- (2) ハイフン (-)
対語・対句の連結, 合成語に用いる。
- (3) ダッシュ (—)
注釈的説明を挿入する際に用いる。2 分 (半字分) ダッシュは、期間、引用文献のページを表すのに用いる。
- (4) 引用符 (“ ”)
引用符は “ ” を用いる。
- (5) 丸括弧 ()
原則として, () を使用する。
- (6) コロン (:)
例, 説明, 仮説, 引用文などを導く場合, 副題などに用いる。
- (7) セミコロン (;)
検定結果を列挙する場合, あるいは括弧内に引用文献を列挙する場合に用いる。

4.3.5 英語以外の外国語

本文中における専門用語の英語以外の外国語表記は、可能な限り避けるようにする。なお、次の場合には外国語を用いることができる。

- (1) 外国人氏名などの固有名詞
- (2) 専門用語を英語以外の外国語で、そのまま表記することは望ましいことではない。必要があれば、初出のときに外国語を括弧内に書き添える。
- (3) 引用文献, テスト名, 尺度名
- (4) 動植物のラテン語学名

4.3.6 略語

一般に用いられている略語以外はなるべく用いない。略語法について注意すべき点を次に列挙しておく。

- (1) テスト名や長い専門用語の略語を用いるときは、原典初出のときに括弧内に略語を付け

る。

- (2) 略語には大文字を用いる。字間をあけたりピリオドを付けたりする必要はない。特にピリオドを付けた形で用いることが慣習になっている場合には、慣習どおりの形で用いる。

4.3.7 特殊文字

- (1) イタリック体を用いる場合

- i) 表の題、図の番号
- ii) 本文中に引用されている書籍名、雑誌の名称と巻数
- iii) 統計法に用いられる記号（例： M , SD , t , F , p , df , ns など）
- iv) 動植物のラテン語学名および初出の専門用語
- v) イタリック体を単なる強調のために用いることは望ましくない。

- (2) ボールド体を用いる場合

原則として本文中の見出しと、表の因子構造を強調する数値に限られる。本文中で特定の語句を強調するために用いることはできない。

- (3) アンダーライン・傍点は、原則として用いない。

4.4 数字・数式、統計記号

4.4.1 数字

- (1) 算用数字

数を表示する場合は、原則として算用数字を用いる。ただし、10 未満の数、および文頭では文字で綴る（たとえば、文頭では、21 participants... ではなく、Twenty-one participants... とする）。

- (2) ローマ数字

原則として慣用表現（たとえば、Type II error）などの記述にのみ用いる。

4.4.2 数式

論文中の数式には、すべて通し番号を付ける。

- (1) 数学記号、量記号および変数の記号はイタリック体とし、なるべく JIS (Z8201, Z8202 参照) などで定められたものを使用する。
- (2) 単位、演算を表す記号はローマン体を使用する。
- (3) 分数式は原則として、 $\frac{(a+b)}{(c+d)}$ のように表し、本文中に入れるときは、 a/b , $(a+b)/(c+d)$ のように表す。
- (4) \sin , \log , \exp などの記号は、ローマン体で表す。
- (5) 2つ以上の関連する数式を続けて上下に並べて書くときには、等号の位置でそろえる。

4.4.3 統計記号、その他

- (1) 統計概念の記号として用いる文字は、イタリック体とする。疑問の点は JIS などを参照する。原則として、分散分析表は含めない。 t (), F () などの書き方については、統計学辞典の凡例などを参照のこと。検定結果については、 t , F , χ^2 などの検定統計量の値、自由度、 p 値、および効果量と効果の方向を記述する。点推定値（標本平均や回

帰係数など)を示す場合には、推定精度に関する情報(標準誤差など)をあわせて示す。論文では一貫した有意水準によって信頼区間を表示することが望ましい。

資料に対して行った各種統計的検定の結果を文末で示すときには、文をカンマ(,)で区切り以下のようにつづける。

$$F(1, 10) = 6.18, p < .05; F(4, 40) = 22.71, p < .01, MSe = .005$$

$$t(22) = 6.16, p < .01$$

$$\chi^2(4, N = 90) = 10.51, p < .05$$

- (2) 百分率はすべて%の記号を用いる。
- (3) 特殊な記号、たとえば Hull の理論に用いられている sHR のようなものは、特に明記し、大文字、小文字、字体、上つき、下つきなどを明確にしておく。
- (4) 欠測を伴うデータを分析する場合には、欠測の頻度や件数を示すとともに、採用した欠測発生モデルと対応方法を記述する。

4.5 単 位

計量単位は、原則として国際単位系(SI)を用いる。ただし SI 以外の単位も編集委員会で適当と認められた場合は使用できる。

4.5.1 国際単位系

基本単位と組立単位があり、それぞれ固有の名称と記号が与えられている。基本単位、組立単位ならびにそれらに併用できることを国際度量衡委員会が認めている単位のうち、心理学に関係あるものを付録 1 (pp.69-73) に記す。

4.5.2 分量・倍量単位を表すための接頭語

基本単位、組立単位、併用単位のままでは大きすぎたり、小さすぎたりする場合、その 10 の整数倍 (10^{-24} から 10^{24} までの分量・倍量)を表す接頭語を使用できる(付録 1-4, Table 11, p.72)。

4.5.3 単位記号の使用

- (1) 単位記号は、ローマン体を用い、一般に小文字で表すが、記号が固有名詞に由来する場合と、 10^6 以上の接頭語には大文字を用いる。
- (2) セルシウス度(摂氏)℃、国際単位に併用できる単位である min(分)、h(時)、d(日)、°(度)、'(分)、"(秒)、および L(リットル)は使用できる。
- (3) 単位記号には、複数形やピリオド(.)を付けない。たとえば min.のようにピリオド(.)は付けず、min とする。接頭語は 1 個のみを使用し、単位記号の前にそれと一体のものとして示す。ただし、基本単位の kg のみは kg でなく、g に 1 個の接頭語が付くように接頭語を選ぶ。たとえば、1 kkg ではなく、1 Mg とし、1 m m は m の前に 2 つの接頭語が付くので避け、1 nm とする。
- (4) 単位の前にくる数値が 0.1 から 1,000 の範囲になるように接頭語を選ぶ。たとえば 2,000 kg でなく 2 Mg とし、0.00394 m でなく 3.94 mm とする。ただし、同一の表や一連の文章の中でいくつかの数値を比較するときなどは、この範囲を超えても同一の接頭

語を用いたほうがよい。

- (5) 組立単位に接頭語を付ける場合は、接頭語が先頭にだけ付くようにする。たとえば 1 m/ms でなく 1 mm/s とする。
- (6) 組立単位が2個以上の単位の積として構成されている場合は、乗法の記号として、 $\text{N} \cdot \text{m}$ のように点（中黒）をはさんで表すが、誤解の恐れがなければ Nm のように点を省略してもよい。しかし、これを mN と表してはいけい。 mN はミリニュートンでニュートン・メートルではない。 m は、「ミリ」と「メートル」の両方を表すので特に注意する必要がある。
- (7) 組立単位が2個以上の単位の除算で構成されている場合は、 m/s のように斜線、または、 $\text{m} \cdot \text{s}^{-1}$ のように負の指数のいずれで表してもよい。ただし、斜線を2個以上使用してはいけい。たとえば、 W/sr/m^2 とはせず、 $\text{W} \cdot \text{sr}^{-1} \cdot \text{m}^{-2}$ または $\text{W}/(\text{sr} \cdot \text{m}^2)$ とする。
- (8) 量を表す数字と単位との間には 100 m のように半角の空白をおく。またやむをえず大きな数を表示しなければならない場合は $86,400\text{ m}$ のように3桁ごとにカンマで区切る。
- (9) dB （デシベル）は SI に含まれないが、使用することができる。

4.5.4 SI に適しない例

国際単位系では不適当とみなされる例と、その正しい表し方を付録に示す（付録1-5, Table 12, p.73）。

4.6 引用・言及

4.6.1 文献の引用

(1) 著者名・刊行年

本文中に文献を引用する場合、著者名（姓、ファミリー・ネーム）の直後に刊行年を添える。

i) 本文中に文章として入れる場合

“Sato (2013) presented evidence...”

ii) 括弧内に文献を示す場合

“...be experienced (Shigemasu, 2013).”

iii) 同一著者で、同一年に刊行された文献がいくつかある場合、刊行年のあとにアルファベット小文字 a, b... を付して区別する。

“Miyano (2013a) found..., and Miyano (2013b) examined...”

“... within the tasks (Morikawa, 2013a, 2013b).”

iv) 異なる著者で、同一姓の文献の引用があり、混同の恐れのある場合、イニシャルを添える。

“In this paper, M. K. Yamaguchi (2013)...”, “in psychological studies (H. Yamaguchi, 2013).”

(2) 自著の引用

著者自身の既刊文献の引用は、“Author...” などとせず、“Ito (2013)...” のようにする。

(3) 共著（著者2名）

著者が2名の共著の場合は、引用のたびごとに両著者名を書く。本文中は“and”，括弧内は“&”を用いる。

“Ochi and Shimizu (2013) showed...”, “... (Ochi & Shimizu, 2013).”

(4) 共著（著者が3—5名）

著者が3—5名の共著の場合は、初出の際には全著者名を書く。2度目以後は、第1著者名を書き、第2著者以降は“et al.”と略記する。

初出 “Haryu, Horike, and Uebuchi (2013) showed...”

“... (Haryu, Horike, & Uebuchi, 2013).”

2度目以降 “Haryu et al. (2013) suggested...”, “... (Haryu et al., 2013).”

(5) 共著（著者が6名以上）

著者が6名以上の場合は、初出の際も2度目以降も第1著者名以外は“et al.”と略記する。3—5名の共著文献の2度目以後（4.6.1（4），p.56）と同じ省略表記になる場合は、刊行年の後にアルファベット小文字 a, b... を付して区別する。

“Suzuki et al. (2013) reported...”, “... (Suzuki et al., 2013).”

(6) 翻訳書の引用

翻訳書を引用する場合は、原著者名と、その刊行年、翻訳書の刊行年を表記する。

“Frank (1988/1995)...”, “(... Frank, 1988/1995).”

(7) 文献引用の順序

本文中の同一箇所でも複数の文献を引用するときには、文末の同じ括弧内に著者名のアルファベット順にセミコロンの (;) で区切り、また同一著者については、刊行年順に並べてそれらをカンマ (,) で区切り示す。

“... (Arimitsu, 2013; Arimitsu & Ito 2011; Usui et al. 2012, 2013).”

4.6.2 文章の引用

(1) 文献の記述の一部を直接引用するときには、原文（翻訳文）のとおり正確に転記する。

(2) 引用文は別行とせずに本文に続け、引用符（“ ”）で囲む。

(3) 引用文中にさらに引用句があるときには、内側に ‘ ’ を用いる。

(4) 引用文には、末尾に著者名、刊行年、掲載ページを書き添える。

“... (Umeda, 2013, pp. 150-152).”

(5) 原典が入手困難なために翻訳書による場合は、翻訳書の引用の仕方に従い、掲載ページを明記する。

“... (Ebbinghaus, 1885/1978, p. 93).”

(6) 文章を引用する際には、著作権者の許可が必要な場合があるので注意する。

(7) 原文の一部を省略した場合には、“...”で示す。

4.6.3 図・表の引用

(1) 図や表について本文中で言及するときは、Figure 1, Table 1 のように表記する。

(2) 他の文献の図や表を引用する場合は、その旨が明確になるように出典（著者名、刊行年、

掲載ページ，原典の図・表の番号）を括弧内に書き添える。

“Figure 1. Research Model of Experiment 1 (Ogino, 2013, p. 120, Figure 3).”

- (3) 図・表の引用にあたっては，著作権者の許可が必要な場合があるので注意する。

4.6.4 氏名・機関名への言及

- (1) 本文中，氏名に言及するときは，ファースト・ネーム，ミドル・ネームのイニシャルも記し，2 度目以後は姓のみを記す。ただし，引用文献の表記は前出（4.6.1 p.55）の方法による。
- (2) 氏名には，謝辞の場合を除き，敬称や肩書きを付けない。
- (3) 本文中で言及した氏名に所属機関名を書き添える必要があるときは，初出の際に氏名のあとに括弧に入れて示す。
- (4) 本文中，研究機関名に言及するときは，初出の際は略さず正式名称を明記する。2 度目以後は省略表記してもよい。

4.7 表 (Table) (見本 4.1, p.58)

4.7.1 表の原稿

- (1) 表の用紙

表は 1 ページに 1 つの表を書き，引用文献（「本文中」の脚注）のあとに図とは分けて，Table 1 から順におく。

- (2) 表の大きさ

表の 1 行の文字数（横）は，40 文字（半角の数字，アルファベット，または余白）以内であれば，掲載時半ページ幅となる。80 文字以内であれば，全幅とする。なお，表の行数（縦）は，表の題，表の注，余白も含め 49 行が 1 ページに相当する。

4.7.2 表作成上の一般的注意

- (1) 表の作成にあたっては，研究結果を最も効果的に伝えることができるように工夫する。表と図の内容の重複を避けると同時に，必要な情報は漏れなく記載されていなければならない。
- (2) 原則，表の左の項目（スタブ列）は左そろえとし，表の見出しと数値は中央そろえとする。表中の主要な英単語の頭文字は大文字にする。
- (3) 数値は，有効数字を考慮して表記する。また，数字は小数点の位置，小数点以下の桁数をそろえる。
- (4) 数値の単位は，数字が縦に並ぶときはその数値に関する見出しの下，横に並ぶときは項目の右に書き入れる。
- (5) 表中の数字が理論的に必ず 1 以下の場合（たとえば，相関係数）は，0 を付けずに .52 のように小数点以下のみを書く。
- (6) 因子構造を強調する数値は，ボールド体を用いることができる。
- (7) 表中の線はできるだけ少なくし，適当にスペースをとる。縦の罫線は最小限とし，斜線は用いない。

(8) 表について本文で言及し，挿入希望位置を本文の中に指定する。

4.7.3 表の番号，表の題

- (1) 表の番号は，論文中に示す順序に従って Table 1, Table 2 のように算用数字で通し番号を付ける。改行して表の題をイタリック体で付け，末尾にはピリオド (.) を付けず，表の上部に左そろえて表記する。
- (2) 表の題は，できるだけ簡潔にする。また表の題に用いる用語は本文と一致させる。

4.7.4 表の注

表の注は，表の題の下ではなく，表の下に以下の順におき，注の符号のあとに簡潔に記す。説明文の終わりには，ピリオド (.) をつける。

- (1) 表全体に関する補足的説明は，表中に注の符号は付けず，“Note.” を表の下におき，説明文を添える。

- (2) 表中の特定部分に関する注には，表中の該当箇所に注の符号 (^a, ^b, ^c の上つき文字) を付け，複数ある場合は，原則改行せず続ける。

- (3) 表における統計学上の符号の表記

“*”，“**” や “†” などの符号は，5%，1%，10% の統計上の有意水準を示すときに用い，数値の右肩に示し，表の下部にその旨を示す。複数ある場合は改行せずに続ける。

見本 4.1 Table 見本

見出しは
中央そろえ

左項目
(スタブ列) は
左そろえ

	Vocabulary	Low-Wordlike	High-Wordlike
Chronological	.54**	.03	.19
Vocabulary		.16	.32**
Low-Wordlike			.80**
P Vocabulary ^a		.17	.26*

Note. N = 67.
^a P Vocabulary indicates partial correlations of vocabulary age with scores for nonwords with the influence of chronological age controlled.
 * $p < .05$. ** $p < .01$.

表の注

(Yuzawa, M., Saito, S., Gathercole, S., Yuzawa, M., & Sekiguchi, M. (2011). The Effects of Prosodic Features and Wordlikeness on Nonword Repetition Performance Among Young Japanese Children. *Japanese Psychological Research*, 53, p. 59, Table 1. より一部変更)

4.8 図 (Figure) (見本 4.2, 4.3, p.60)

4.8.1 図の原稿

図は多くの情報を直感的に理解しやすい形で示すことができるが、かなりのスペースを要するため、厳選し、必要な図のみを、効果的に使用することが望まれる。他の図や表の内容と重複しないよう注意する。

(1) 図の用紙

表と同じく、1 ページに 1 つの図を描き、引用文献（「本文中」の脚注）のあとに表とは分けて、Figure 1 から順におく。

(2) 図の種類

図にはグラフ、画像、チャートなどがある。必要に応じて折れ線グラフ、棒グラフ、散布図など適切な形式を選択する。折れ線グラフは、連続的に変化する独立変数（横軸）に対応する従属変数（縦軸）の変化を示すなどの場合に利用されるのが原則である。棒グラフは、一般に独立変数が名義尺度（カテゴリー群）である場合などに利用される。散布図は、変数間の関係を示すためなどに利用される。

(3) 図の大きさ

図の中の一番小さな文字が 7 ポイントの大きさになるよう縮小／拡大した横幅が、6.5 cm 以内であれば、掲載時半ページ幅となる。13 cm 以内であれば、全幅とする。なお、図の縦は、図の題（キャプション）、余白も含め 20 cm が 1 ページに相当する。縮尺率を考慮して、作成された図を事前に確認して投稿すること。

4.8.2 図作成上の一般的注意

(1) 作図

作図は、縮尺を考慮して線の太さを決め、コントラストに留意する。なお、原則図の作成にあたっては色を使用しない。図作成ソフトを使用して作図する場合、大外の枠、背景色の存在、不要な線の存在など、“Japanese Psychological Research” の図の作成上の注意と異なる点が多いため、注意を必要とする。

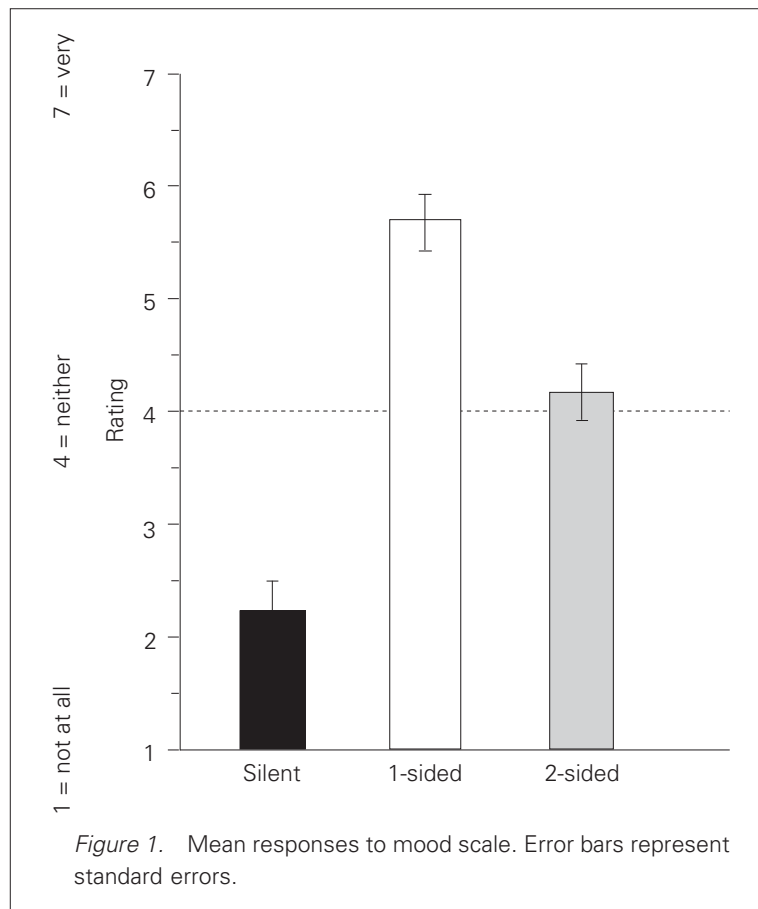
(2) 図の言語

日本語表記を添える必要があるときは、括弧内に日本語を併記する。

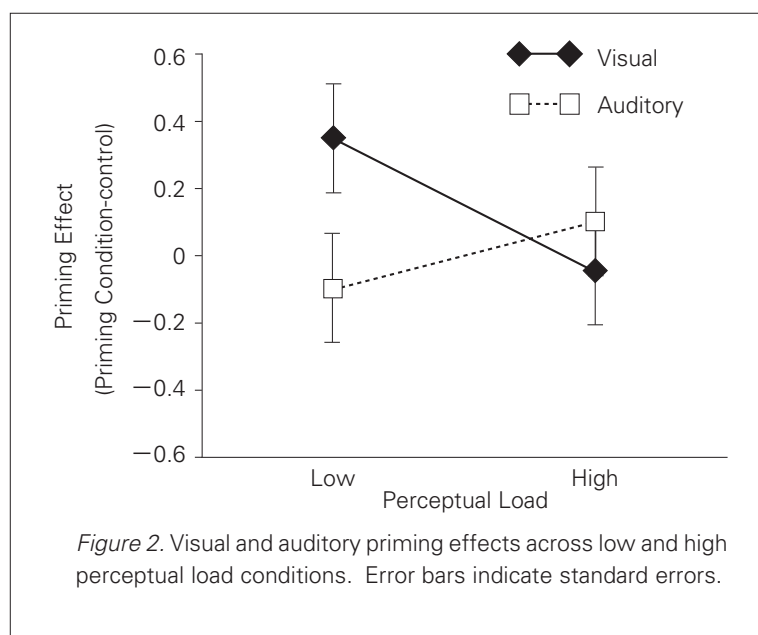
(3) 線と点

- i) 縦軸の途中を省略する場合は、そこに波形、または斜線を入れて切り取ったことを示すとよい。
- ii) 座標軸や曲線、折れ線の太さは、論文を通じて一定にする。座標軸の太さはその図中の一番太い曲線、折れ線と同程度にする。
- iii) 同一論文中に比較対照すべき複数の図があるときは、全部に同じ目盛りを用いる。
- iv) 折れ線のシンボルは縮小すると判別しにくくなることがあるので、大きめに描く。
- v) データの散布度を示すためにエラーバーを用いる場合には、それが標準偏差、標準誤差、信頼区間などのどれを表すのかを明記する。

見本 4.2 Figure 見本



見本 4.3 Figure 見本



(4) 図中の文字

- i) 図中の文字は縮尺を考慮して大きさと太さを決める。図中の単語の頭文字は大文字とする。ただし、単位はSI（付録1, pp.69-73）に従い、大文字か小文字かを決める。
- ii) 座標軸の説明とその単位は各軸の外側中央に示す。縦軸は下から上に向かって横書きで書く。

(5) 図について本文で言及し、挿入希望位置を本文の中に指定する。

(6) パス解析や構造方程式モデル（SEM）の結果をパス図で表示する場合には、標準的な表記を行う。以下の文献を参照のこと。

American Psychological Association. (2010). *Publication manual of the American Psychological Association* (6th ed.). Washington, DC: American Psychological Association. p. 153, Figure 5.2, p. 157, Figure 5.6.

（アメリカ心理学会（APA） 前田 樹海・江藤 裕之・田中 建彦（訳）（2011）.

APA 論文作成マニュアル 第2版 医学書院 p.164 図 5.2, p.168 図 5.6)

(7) 写真は図と同様に扱われる。写真と図の番号は通し番号とする。

4.8.3 図の番号、図の題（キャプション）

- (1) 図の番号は、論文中に示す順序に従って *Figure 1.*, *Figure 2.* のように算用数字で通し番号を付け、イタリック体にする。改行せず図の題を続け、末尾にはピリオド（.）を付ける。
- (2) 図の下に、図の番号および図の題（キャプション）を左そろえて記す。
- (3) 図の題（キャプション）では、図の内容を簡潔に説明する。また図の題に用いる用語は本文と一致させる。

「作図の際の留意事項」については、p.37 参照のこと。

4.9 引用文献（見本 4.4, p.62）

引用文献は本文の次に一括して示す。見出しは“References”とし、中央大見出しとする。読者が検索、参照できるように留意すること。DOI（Digital Object Identifier）を含めることを推奨する。

4.9.1 文献を引用する場合の一般的注意

- (1) 表記が2行以上にわたる場合は、2行目以降を4文字分下げする。
- (2) 著者名（姓）のアルファベット順とし、文献番号は付けない。
- (3) 刊行年
 - i) 文献の刊行年は、すべて刊行された西暦年を用いる。
 - ii) 刊行年には（ ）. を付ける。
 - iii) 2年または3年に1巻を逐次刊行される場合は、(2011-2013). のように2つの年を2分ダッシュ（-）で結んで示す。
 - iv) 「心理学研究」のように1年1巻ではあるが、4月から翌年3月までの年度による場

見本 4.4 References

References	
Blasi, A., Fox, S., Everdell, N., Volein, A., Tucker, L., Csibra, G., ... Elwell, C. E. (2007). Investigation of depth dependent changes in cerebral haemodynamics during face perception in infants. <i>Physics in Medicine and Biology</i> , 52, 6849–6864.	著者 8 名以上
Farroni, T., Johnson, M. H., Menon, E., Zulian, L., Faraguna, D., & Csibra, G. (2005). Newborns' preference for face-relevant stimuli: Effects of contrast polarity. <i>Proceeding of the National Academy of Sciences of the USA</i> , 102(47), 17245–17250.	大会発表
Haryu, E., & Kajikawa, S. (2012). Are higher-frequency sounds brighter in color and smaller in size? Auditory-visual correspondences in 10-month-old infants. <i>Infant Behavior and Development</i> , 35, 727–732.	雑誌
Hirata, S., Ukita, J., & Kita, S. (2011a). Compatibility between pronunciation of voiced/voiceless consonants and brightness of visual stimuli. <i>Cognitive Studies: Bulletin of Japanese Cognitive Science Society</i> , 18, 470–476. (In Japanese with English abstract)	日本語文献
Hirata, S., Ukita, J., & Kita, S. (2011b). Implicit phonetic symbolism in voicing of consonants and visual lightness using Garner's speeded classification task. <i>Perceptual and Motor Skills</i> , 113, 929–940.	
Johnson, M. H., & Morton, J. (1991). <i>Biology and cognitive development: The case of face recognition</i> . Oxford, England: Basil Blackwell.	書籍
Maehara, Y., & Umeda, S. (2013). Reasoning bias for the recall of one's own beliefs in a Smarties task for adults. <i>Japanese Psychological Research</i> . Advance online publication. doi: 10.1111/jpr.12009	早期公開
Marks, L. E. (2004). Cross-modal interactions in speeded classification. In G. A. Calvert, C. Spence, & B. E. Stein (Eds.), <i>The handbook of multisensory processes</i> (pp. 85–105). Cambridge, MA: MIT Press.	特定章
Roediger, H. L. (2012). Psychology's woes and a partial cure: The value of replication. <i>APS Observer</i> , 25. Retrieved from http://www.psychologicalscience.org/index.php/publications/observer/2012/february-12/psychologys-woes-and-a-partial-cure-the-value-of-replication.html	Online 資料
de Saussure, F. (1966). <i>Course in general linguistics</i> (R. Harris, Trans.). New York: McGraw Hill. (Original work published 1916)	翻訳書
Tomita, A., Yamamoto, S., Matsushita, S., & Morikawa, K. (2014). Resemblance to familiar faces is exaggerated in memory. <i>Japanese Psychological Research</i> , 56, 24–32. doi: 10.1111/jpr.12032	doi 表記
Tsukiura, T., Shigemune, Y., Nouchi, R., Kambara, T., & Kawashima, R. (in press). Insular and hippocampal contributions to remembering people with an impression of bad personality. <i>Social Cognitive and Affective Neuroscience</i> .	印刷中

合には、掲載号の刊行年による。

- (4) 文献の表題は、原則として表題と副題の最初の語の頭文字、固有名詞を大文字とし、略さずに書く。副題はコロン（:）のあとに続ける。
- (5) 原則として間接引用はしない。また投稿中、査読中で、印刷刊行されることが確定していない論文の引用は原則できない。

4.9.2 文献の表記の仕方

(1) 著者名

i) 一般的書き方

著者名は、姓を先に書き、カンマ（,）をおき、ファースト・ネーム、ミドル・ネームのイニシャルの順で書く。イニシャルのあとにはピリオド（.）を付ける。もし同姓で、イニシャルも同じ著者があるときは、名も略さずに書く。著者名の表記法は、原著者のそれに従う。

Takahashi, N. (2013)., Takahashi, Noboru (2013)., Takahashi, Nobuyuki (2013).

ii) 共著（著者が7名以下）

すべての著者を書き、最後の著者の前にカンマ（,）と&をおく。and と綴らぬこと。

Omi, Y., Katayama, J., & Kanazawa, S. (2013).

iii) 共著（著者が8名以上）

著者が8名以上の場合は、第1から第6著者まで書き、途中の著者は“...”で省略表記し、最後の著者を書く。

Hibino, H., Muto, T., Ando, K., Uchida, N., Suzuki, N., Naka, M., ... Yokota, M. (2014).

(2) 書籍

書籍の場合は、著者名、刊行年、書籍名、初版以外は版数、出版地、出版社を書く。書籍名はイタリック体とする。

i) 一般的な例

（著者名），（刊行年），（書籍名），（出版地：出版社）

Cain, K. (2010). *Reading development and difficulties: An introduction*. Oxford: Wiley-Blackwell.

ii) 新版：初版以外は必ず版数を明記しておく。版（edition）は ed. と省略表記する。

（著者名），（刊行年），（書籍名）（版数），（出版地：出版社）

American Psychiatric Association. (2000). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders* (4th ed., Text Revision). Washington, DC: American Psychiatric Association.

iii) 編集書：編集者（editor）は Ed. と省略表記し、編集者が複数のときは Eds. と省略表記する。

（編集者名）（Ed., Eds.），（刊行年），（書籍名），（出版地：出版社）

Shwalb, D. W., Nakazawa, J., & Shwalb, B. J. (Eds.). (2005). *Applied developmental*

psychology: Theory, practice, and research from Japan (Advances in applied developmental psychology series). Charlotte, NC: Information Age Publishing.

iv) 編集書中の特定章

(著者名), (刊行年), (表題), In (編集者名) (Ed., Eds.), (書籍名) (引用ページ), (出版地: 出版社)

Enns, J. T., Visser, T. A. W., Kawahara, J., & Di Lollo, V. (2001). Visual masking and task switching in the attentional blink. In K. Shapiro (Ed.), *The limits of attention: Temporal constraints in human information processing* (pp. 65–81). New York: Oxford University Press.

v) 数巻にわたる書籍

(著者名), (刊行年), (書籍名) (Vols. 巻数), (出版地: 出版社)

Bowlby, J. (1968–1980). *Attachment and loss* (Vols. 1–3). New York: Basic Books.

vi) 数巻にわたる書籍の特定の1巻

(著者名), (刊行年), (書籍名), (シリーズ名, 巻数など), (出版地: 出版社)

Liben, L. S., & Mueller, U. (Ed.). (2015). *Cognitive processes*. (R. M. Lerner, Series Ed.) *Handbook of child psychology and developmental science*. Vol. 2. UK: Wiley.

vii) 翻訳書

(原著者名), (翻訳書刊行年), (翻訳書籍名) (翻訳者名, Trans.), (翻訳書出版地: 出版社), (Original work published 原書刊行年など)

Oguma, E. (2002). *A genealogy of Japanese self-images* (D. Askew, Trans.). Melbourne: Trans Pacific Press. (Original work published 1996)

viii) 再版

(著者名), (再版刊行年), (書籍名), (出版地: 出版社), (Original work published 初版刊行年など)

Thorndike, E. L. (2013). *Animal intelligence*. [Kindle] Los Angeles: Library of Alexandria. (Original work published 1911, New York: Macmillan Company)

(3) 逐次刊行物 (学術誌を含む雑誌, 年報, 紀要など)

逐次刊行物の場合は, 著者名, 刊行年, 表題, 誌名, 巻数, ページを書く。誌名, 巻数をイタリック体, 引用文献の最初と最後のページを2分ダッシュ (–) をはさんで記す。誌名は, 原則として正式名称を, 省略せず記載する。主要語の頭文字は大文字とし, 慣例により The は省略する。類似の紛らわしい, あるいは全く同一の名称の場合は, 誌名のあとに, 刊行主体 (あるいは刊行地) を括弧に入れて明示する。

i) 各巻通しページ付き論文

(著者名), (刊行年), (表題), (誌名), (巻数), (引用ページ)

Matthews, G., Zeidner, M., & Roberts, R. D. (2012). Emotional intelligence: A promise unfulfilled? *Japanese Psychological Research*, 54, 105–127.

ii) 各巻通しページなし論文

各号ごとに独立したページが付され、1巻を通してのページ付けがない論文の場合は、巻数の直後に号数を括弧内に入れて記す。

(著者名), (刊行年), (表題), (誌名), (巻数) (号数), (引用ページ)

Bravo, M. J., & Farid, H. (2009). The specificity of the search template. *Journal of Vision*, 9 (1), 1-9.

iii) モノグラフ, シリーズ通し番号付き

(著者名), (刊行年), (表題), (シリーズ名), (号数)

Reese, T. W. (1943). The application of the theory of physical measurement to the measurement of psychological magnitude with three examples. *Psychological Monographs*, No. 251.

iv) 年報・年鑑, 紀要

紀要, 報告書の名称が同一で, いくつかの部門, シリーズに分かれているものには, 表題の直後に続けて, その部門やシリーズの名称を記す。なお, 紀要, 報告等の名称に, その大学などの名称が含まれていない場合は括弧に入れて記す。

(著者名), (刊行年), (表題), (誌名), (出版社, 巻数, 号数, 引用ページなど)

Muto, S. (2013). What are the educational functions of (emotional) respect? Exploring the possibilities of the “self-Pygmalion process” hypothesis. *Bulletin of the Graduate School of Education, University of Tokyo*, 52, 393-401.

(4) オンライン資料の引用

i) 刊行された冊子体がある場合には, 冊子体を引用文献として記載する。

ii) 刊行されることが確定し, 刊行までの間, オンラインで早期公開 (Early View) されている場合, 刊行年の表記は (公開年) とし, 早期公開である旨と DOI を明記する。刊行されたあとは, 冊子体の表記に差し替える。

(著者名), (公開年), (表題), (誌名), (Advance online publication. doi: xxx)

Kaneshige, T., & Haryu, E. (2014). Categorization and understanding of facial expressions in 4-month-old infants. *Japanese Psychological Research*. Advance online publication. doi: 10.1111/jpr.12075

iii) オンライン上でのみしか閲覧できない資料で, DOI がある場合は, DOI を記載する。

(著者名), (刊行, 公開年), (表題), (掲載名称), (doi: xxx)

Sugiura, Y. (2013). The dual effects of critical thinking disposition on worry. *PLoS ONE*, 8(11), e79714. doi:10.1371/journal.pone.0079714

iv) オンライン上でのみしか閲覧できない資料で, DOI がない場合は, 次の書式で記載する。

(著者名), (公開年), (表題), (ウェブサイト名), (Retrieved from URL), (アクセス年月日)

American Psychological Association. (2014). APA databases: PsycINFO. American Psychological Association. Retrieved from <http://www.apa.org/pubs/databases/>

psycinfo/index.aspx (October 29, 2014)

ただし, iii), iv) の場合, オンラインからの削除が予想されるので, 編集委員会からの請求があった場合, 速やかに対応できるようにする。

(5) その他

i) 学位論文など

学位論文などの年次は年度によらず, 修了, 授与の年をもって示す。また抄録などが公刊されている場合は, それによる。

(著者名), (修了, 授与年), (表題) (Unpublished master's thesis, doctoral dissertation), (大学名, 所在地)

Kitazaki, M. (1997). *Mobile observer's visual perception: Application of the generic-view principle to three-dimensional motion perception* (Unpublished doctoral dissertation). University of Tokyo, Tokyo.

ii) 学会などでの発表

(著者名), (刊行, 発表年), (表題), (誌名, 大会名), (引用ページ)

Sawaumi, T., Fujii, T., & Aikawa, A. (2012). A negative relation between shyness and self-esteem at an implicit level investigated with an Implicit Association Test. *Paper presented at the 30th International Congress of Psychology* (Cape Town, South Africa), 711.

iii) 印刷中の論文

刊行されることが確定してはいるが未刊行の場合, 刊行年の代わりに“(in press)”と明記する。

(著者名), (in press), (表題), (誌名)

Hwan, K.-K. (in press). Philosophical switch for the third wave of psychology in the age of globalization. *Japanese Psychological Research*.

iv) 新聞記事および雑誌記事の引用

新聞記事および雑誌の記事を引用する場合は, 執筆者(分からなければ掲載紙(誌)名), 発行年, 資料表題, 掲載紙(誌)名, 発行日(朝刊・夕刊), 掲載ページの順で記載する。

Frاندale, N. (2002). Living on his nerves. *Sunday Telegraph Magazine*, March 17, pp. 12-19.

4.9.3 日本語文献の表記の仕方

- (1) 表記法は, 外国語文献の書き方に準ずる。著者名のローマ字表記は原著者のそれに従う。
- (2) 文献名は, 日本語文献に原著者による英訳の付いているときは, それを用いる。これがないときには, 可能であれば, 原著者に確認し記載する。確認が取れない場合には, 適宜英訳したものを記載し“(In Japanese, translated by the author of this article)”と付記する。
- (3) 日本語の文献は, “(In Japanese)”と付記し, 日本語の文献であることを明示する。ま

た英文アブストラクトの付いているものには、“(In Japanese with English abstract)” と明示する。

Nakama, R., Sugimura, K., Hatano, K., Mizokami, S., & Tsuzuki, M. (2015). Researching identity development and statuses with the Dimensions of Identity Development Scale: The Japanese version. *Japanese Journal of Psychology*, 85, 549-559. (In Japanese with English abstract)

- (4) 書籍の場合、出版社名は、出版社による英語表記に従う。
- (5) 雑誌名は、刊行元による英語表記に従う。英語表記のない場合には、日本名をローマ字（ヘボン式）に直して記載し、括弧内に英訳を添える。

4.9.4 引用文献の記載順序

- (1) 引用文献は、日本語文献と外国語文献を分けず、共著の場合も、第1著者の姓のアルファベット順に配列することを原則とする。
- (2) 同一著者が、単独で発表している文献と、その著者が第1著者として名を連ねている共著の文献がある場合には、単著を先にし、次に共著を並べる。また、第1著者が同一で、第2著者が異なるときは、刊行年ではなく、第2著者の姓のアルファベット順にそれらを並べる。第3著者以降も同様である。

Sugawara, K. (2013).

Sugawara, K., Ogawa, T., & Takehara, T. (2012).

Sugawara, K., & Takehara, T. (2011).

- (3) 同一著者の、あるいは同一配列の共著の文献がいくつかある場合には、早い刊行年のものから順に並べる。同一年に刊行された文献がいくつかある、あるいは、本文への引用の際の省略表記が同一となる場合、刊行年のあとに、アルファベット小文字 a, b... を付して区別する。

Watanabe, S. (1999a).

Watanabe, S. (1999b).

- (4) 冠詞や前置詞

冠詞や前置詞（de, la, du, von, van der, della など）を含む著者名については、それぞれの言語によって規則があるから、それに従ってアルファベットの位置を定める。西洋人名辞典や抄録雑誌の人名索引などで調べるとよいが、一般に著者が、これらの語を大文字で始めているときは、それによってアルファベット順に記し、小文字で始めているときは、無視して配列する（たとえば、Le Bras は“L”により、von Helmholtz は“v”ではなく、“H”によって配列する）。

4.10 英文アブストラクトとキーワード

4.10.1 英文アブストラクト

100—175 語の英文アブストラクトを添付する。英文アブストラクトには問題（目的）、方法、結果、考察または結論を含める。

4.10.2 キーワード

英文アブストラクトの下にその論文の分類，検索などのための，その論文を特徴づける英語のキーワードを3—5項目つける。検索の便のため，次の基準に従う。

- (1) キーワードは名詞または名詞句であり，複数形をとり得るもの（countable noun）は複数形で示す。

（例）theory — theories, mouse — mice, child — children

- (2) 原則として略語は使わない。
- (3) 英文アブストラクトまたは本文中と異なった語を用いてもよい。

（例）hyperactivity — hyperkinesis, quantification — measurement

- (4) 固有名詞（氏名，地名，テスト名など）もキーワードになり得る。なお固有名詞などのように大文字を使う必然性がある場合以外はすべて小文字で書く。

（例）Freud (Sigmund), Wechsler Adult Intelligence Scale

「キーワードの設定はその後の引用に影響する」については，p.48 参照のこと。

付 録

付録 1 単位記号

1 基本単位と補助単位

Table 1 基本単位			
量		単位の名称	記号
長	さ	メートル	m
質	量	キログラム	kg
時	間	秒	s
電	流	アンペア	A
熱力学温度		ケルビン	K
物	質 量	モル	mol
光	度	カンデラ	cd
補助単位			
量		単位の名称	記号
平 面 角		ラジアン	rad
立 体 角		ステラジアン	sr

2 組立単位

Table 2 固有の名称をもつ組立単位（一部）				
量	SI 単位			
	名称	記号	定義	
周 波 数	ヘルツ	Hz	s^{-1}	
力	ニュートン	N	$kg \cdot m/s^2$	
圧 力, 応 力	パスカル	Pa	N/m^2	
エネルギー, 仕事, 熱量	ジュール	J	$N \cdot m$	
仕事率, 工率, 動力, 電力	ワット	W	J/s	
電 圧, 電 位	ボルト	V	W/A	
静 電 容 量	ファラド	F	C/V	
電 気 抵 抗	オーム		V/A	
コンダクタンス	ジーメンズ	S	A/V	
インダクタンス	ヘンリー	H	Wb/A	
光 束	ルーメン	lm	$cd \cdot sr$	
照 度	ルクス	lx	lm/m^2	

3 心理学に関係ある SI 単位と併用単位

Table 3
空間および時間

量	単位の名称	記号	備 考
平 面 角	ラジアン	rad	1° (度), 1' (分), 1" (秒) は併用できる
立 体 角	ステラジアン	sr	
長 さ	メートル	m	
面 積	平方メートル	m ²	1L (リットル) は併用できる 1 min (分), 1 h (時), 1 d (日) は併用できる
体積, 容量	立方メートル	m ³	
時 間	秒	s	
角 速 度	ラジアン毎秒	rad/s	
速度, 速さ	メートル毎秒	m/s	
加 速 度	メートル毎秒毎秒	m/s ²	

Table 4
周期現象および関連現象

量	単位の名称	記号	備 考
周波数, 振動数	ヘルツ	Hz	1 Hz = 1 s ⁻¹
回転速度, 回転数	回毎秒	s ⁻¹	min ⁻¹ は併用できる

Table 5
力 学

量	単位の名称	記号	備 考
質 量	キログラム	kg	1 t (トン) は併用できる
力	ニュートン	N	1 N = 1 kg · m/s ²
圧 力	パスカル	Pa	1 Pa = 1 N/m ² 1 bar (バール) は併用できる
仕事, エネルギー	ジュール	J	1 eV (電子ボルト) は併用できる
仕事率, 工率, 動力	ワット	W	1 W = 1 J/s

Table 6
熱

量	単位の名称	記号	備 考
熱力学温度	ケルビン	K	° はつけない
セルシウス温度	セルシウス度	°C	これも SI 単位
温度間隔, 温度差	ケルビン	K	セルシウス温度の温度間隔 ないし温度差は°Cでもよい
熱・熱量	ジュール	J	カロリーは不可

Table 7
電気および磁気

量	単位の名称	記号	備 考
電 流	アンペア	A	
電荷, 電気量	クーロン	C	$1\text{ C} = 1\text{ A}\cdot\text{s}$
電位, 電位差, 電圧, 起電力	ボルト	V	$1\text{ V} = 1\text{ W/A}$
静電容量, キャパシタンス	ファラド	F	$1\text{ F} = 1\text{ C/V}$
自己インダクタンス, 相互インダクタンス	ヘンリー	H	$1\text{ H} = 1\text{ V}\cdot\text{s/A}$
磁束密度, 磁気誘導	テスラ	T	$1\text{ T} = 1\text{ V}\cdot\text{s/m}^2$
(電気) 抵抗 (直流)	オーム		$1\text{ } = 1\text{ V/A}$
(電気の) コンダクタンス (直流)	ジーメンズ	S	$1\text{ S} = 1\text{ A/V} = 1\text{ }^{-1}$

Table 8
光および関連する電磁放射

量	単位の名称	記号	備 考
波 長	メートル	m	Åは併用してもよい
放射エネルギー	ジュール	J	
放 射 束	ワット	W	
放 射 強 度	ワット毎ステラジアン	W/sr	
放 射 輝 度	ワット毎ステラジアン 毎平方メートル	W/(sr·m ²)	
放射発散度	ワット毎平方メートル	W/m ²	
放 射 照 度	ワット毎平方メートル	W/m ²	
光 度	カンデラ	cd	
光 束	ルーメン	lm	$1\text{ lm} = 1\text{ cd}\cdot\text{sr}$
光 量	ルーメン秒	lm·s	
輝 度	カンデラ毎平方メートル	cd/m ²	
光束発散度	ルーメン毎平方メートル	lm/m ²	
照 度	ルクス	lx	$1\text{ lx} = 1\text{ lm/m}^2$

Table 9
音

量	単位の名称	記号	備 考
周 期	秒	s	
周波数, 振動数	ヘルツ	Hz	
波 長	メートル	m	
密 度	キログラム毎立方メートル	kg/m ³	
静圧 (瞬時) 音圧	パスカル	Pa	1 bar (バール) は併用できる
音の速さ, 音速	メートル毎秒	m/s	
音響エネルギー束, 音響パワー	ワット	W	
音 の 強 さ	ワット毎平方メートル	W/m ²	
音響インピーダンス	パスカル秒毎立方メートル	Pa·s/m ³	

Table 10
物理化学および分子物理学

量	単位の名称	記号	備 考
物 質 量	モル	mol	
モ ル 濃 度	モル毎立方メートル	mol/m ³	

4 単位につける接頭語

Table 11
基本単位

名称	記号	大きさ
ギガ (giga)	G	10 ⁹
メガ (mega)	M	10 ⁶
キロ (kilo)	k	10 ³
ヘクト (hecto)	h	10 ²
デカ (deca)	da	10
デシ (deci)	d	10 ⁻¹
センチ (centi)	c	10 ⁻²
ミリ (milli)	m	10 ⁻³
マイクロ (micro)		10 ⁻⁶
ナノ (nano)	n	10 ⁻⁹

5 不適切な単位の使用例とその正しい表し方

Table 12
単位の正しい表し方

SI に適しない単位の例	SI に適した単位の例
(ミクロン)	m (マイクロメートル)
m (ミリミクロン)	nm (ナノメートル)
sec (秒)	s
c/s, cps	Hz (ヘルツ)
nt (ニト)	cd/m ²
1 mL (ミリランベルト)	3.183 cd/m ²
1 sb (スチルブ)	10 kcd/m ²
°K (ケルビン)	K
1 cal (カロリー)	4.186 05 J (ジュール)
1 erg (エルグ)	0.1 J (マイクロジュール)
1 dyn (ダイン)	10 N (マイクロニュートン)
1 Gs (ガウス)	0.1 mT (ミリテスラ)
rpm (1 分あたりの回転数)	min ⁻¹

付録2 校正の記号とその意味

指示する事項	校正の方法	校正後
誤字をなおせ	日本心理学会執筆・投稿の手ひき	日本心理学会執筆・投稿の手びき
取って、つめよ	子どもが言語習得等の過程で、どの	子どもが言語習得の過程でどの
もとのままでよい	本実験で得られた結果は、全般的	本実験で得られた結果は、全般的
文字を挿入せよ	統制群と実験群の参加の平均	統制群と実験群の全参加者の平均
字を入れかえよ	実験群における遂行模倣得点は	実験群における模倣遂行得点は
明朝体になおせ	刺激語対の関連性のタイプに	刺激語対の関連性のタイプに
ゴシックになおせ	優位集団 集団規範からの	優位集団 集団規範からの
句読点、中黒を入れよ	同調逸脱行動の関係は集団の	同調・逸脱行動の関係は、集団の
右に移せ、左に移せ	実験参加者 試行間の操作	実験参加者 試行間の操作
促音、拗音を小さくせよ	形態マツチングを行つたあと	形態マツチングを行ったあと
表ケイ（細い線）にせよ		
裏ケイ（太い線）にせよ		
ローマン体にせよ	Group dynamics	Group dynamics
イタリック体にせよ	Psychological Review	Psychological Review
ボールド体にせよ	Psychological Research	Psychological Research
ボールドイタリック体にせよ	Psychological Research	Psychological Research
大文字にせよ	child development	Child Development
小文字にせよ	Effect of Verbalization	effect of verbalization
ハイフン、ダッシュを入れよ	nonspecific 80 302 秒	non-specific 80-302 秒
下つき、上つきにせよ	S ₁ N ₂ 10 ⁶ 参加者	S ₁ N ₂ 10 ⁶ 参加者*
改行せよ	支持を与える。本研究では、……	支持を与える。 本研究では、……………

付録3 「心理学研究」投稿のためのチェックリスト

下にあげたチェックリストは、原稿を書く時によく見落とされる事柄である。著者は、これらの点を確認した上で、原稿を編集部へ提出していただきたい。ページは「執筆・投稿の手びき」中の該当する箇所のページを表す。

論文情報

- (1) 論文の種類は適切か。論文の長さは、種類ごとの規定ページにおさまっているか。_____ p.24
- (2) 表題のつけ方（副題は2倍ダッシュで囲む）と文字数（30文字程度）は適切か。_____ p.25
- (3) 共著の場合、全員の著者名、所属機関名（日本語、英語）が入力されているか。_____ p.25
- (4) 英文アブストラクトの長さは適切か（100—175語）。ネイティブの専門家の英文校閲を受けたか。キーワードは適切に設定されているか（3—5項目）。_____ p.48

原稿の書き方

- (1) 用紙の大きさ（A4判）、1ページの文字数と行数（25文字×32行、10.5ポイント以上）、上下左右の余白（3cm以上）の取り方は適切か。_____ p.15, p.24
- (2) 原稿PDFファイルには、表題（日本語、英語）、英文アブストラクトとキーワード、本文、引用文献、「本文中」の脚注、図（図ごとに図の題と注を含め、改ページ）、表（表ごとに表の題と注を含め、改ページ）の順にすべて適切に書かれているか（著者名、所属機関名、「表題ページ」の脚注は含めない）。_____ p.15, pp.24-48
- (3) 通しページを付けているか。_____ p.24

段落と見出し

- (1) 見出しの付け方（3種類のみ）、見出し以外の序列（1., (a)）は適切か。_____ p.26
- (2) 段落の区切り方は適切か。_____ p.26

略語

- (1) 不適切な略語や不必要な説明はないか。_____ p.28
- (2) 略語に説明が付いているか。_____ p.28

測定の単位

- (1) 測定の単位とその略号は、国際単位系（SI）にしたがっているか。_____ pp.29-30

引用文献

- (1) 引用文献の記述は正しいか。また、本文中の引用と綴りや年が合致しているか。_____ pp.31-33, pp.38-48

脚注

- (1) 「表題ページ」の脚注には、（英文連絡先）、研究助成、大会発表、謝辞、著者の改姓（名）、所属機関の異動などが正しく記載されているか。_____ pp.25-26
- (2) 「本文中」の脚注は、必要最小限か。「表題ページ」の脚注から続く通し番号が付けられているか。_____ pp.26-27

図表

- (1) それぞれの図表には、番号、題、必要に応じて注が付いているか。_____ p.35, p.38
- (2) すべての図表が、本文の中で引用されているか。図表の番号は本文中で言及される順序どおりか。本文に挿入位置が示されているか。_____ pp.33-38
- (3) 表の罫線は最小限になっているか。_____ p.35
- (4) 図の大きさは適切か。図の各部分は縮小印刷されても判別できるか。_____ p.37

著作権と引用

- (1) 既刊の論文・図表を引用する場合に、必要に応じて書面による許可をもとめたか。_____ p.32
- (2) 引用には、すべて出典と掲載ページが入っているか。_____ pp.31-33
- (3) この論文は未公開であり、二重投稿や剽窃にあたらないか。_____ p.10

投稿の仕方

- (1) 電子投稿システムの著者マニュアルを確認したか。_____ p.12
- (2) 倫理チェックリストにすべて回答したか。_____ pp.77-78

付録4 “*Japanese Psychological Research*” 投稿のためのチェックリスト

下にあげたチェックリストは、原稿を書く時によく見落とされる事柄である。著者は、これらの点を確認した上で、原稿を編集部へ提出していただきたい。ページは「執筆・投稿の手びき」中の該当する箇所のページを表す。

論文情報

- (1) 論文の種類は適切か。論文の長さは、種類ごとの規定ページにおさまっているか。_____ p.49
- (2) 表題のつけ方（副題にはコロンを付ける）と文字数（12—15 語程度）は適切か。_____ p.50
- (3) 共著の場合、全員の著者名、所属機関名が入力されているか。_____ p.50
- (4) 英文アブストラクトの長さは適切か（100—175 語）。キーワードは適切に設定されているか（3—5 項目）。_____ pp.67-68

原稿の書き方

- (1) 本文は英語とし、用紙の大きさ（A4 判）、文字設定と 1 ページの行数（一般的フォント、10.5 ポイント以上、ダブルスペース、23 行以内）、上下左右の余白（3cm 以上）の取り方は適切か。_____ p.15, p.49
- (2) 原稿 PDF ファイルには、表題、英文アブストラクトとキーワード、本文、引用文献、「本文中」の脚注、図（図ごとに図の題（キャプション）を含め、改ページ）、表（表ごとに表の題と注を含め、改ページ）の順にすべて適切に書かれているか（著者名、所属機関名、「表題ページ」の脚注は含めない）。_____ p.15, pp.49-68
- (3) 通しページを付けているか。_____ p.49
- (4) ネイティブの専門家の英文校閲を受けたか。_____ p.49

段落と見出し

- (1) 見出しの付け方（3 種類のみ）、見出し以外の序列（1., (a)）は適切か。_____ p.51
- (2) 段落の区切り方は適切か。_____ p.51

略語

- (1) 不適切な略語や不必要な説明はないか。_____ pp.52-53
- (2) 略語に説明が付いているか。_____ pp.52-53

測定の単位

- (1) 測定の単位とその略号は、国際単位系（SI）にしたがっているか。_____ pp.54-55

引用文献

- (1) 引用文献の記述は正しいか。また、本文中の引用と綴りや年が合致しているか。_____ pp.55-57, pp.61-67

脚注

- (1) 「表題ページ」の脚注には、（英文連絡先）、研究助成、大会発表、謝辞、著者の改姓（名）、所属機関の異動などが正しく記載されているか。_____ pp.50-51
- (2) 「本文中」の脚注は、必要最小限か。「表題ページ」の脚注から続く通し番号が付けられているか。_____ pp.51-52

図表

- (1) それぞれの図表には、番号、題、必要に応じて注が付いているか。_____ p.58, p.61
- (2) すべての図表が、本文の中で引用されているか。図表の番号は本文中で言及される順序どおりか。本文に挿入位置が示されているか。_____ pp.57-61
- (3) 表の罫線は最小限になっているか。_____ p.57
- (4) 図の大きさは適切か。図の各部分は縮小印刷されても判別できるか。_____ p.59

著作権と引用

- (1) 既刊の論文・図表を引用する場合に、必要に応じて書面による許可をもとめたか。_____ pp.56-57
- (2) 引用には、すべて出典と掲載ページが入っているか。_____ pp.55-57
- (3) この論文は未公開であり、二重投稿や剽窃にあたらないか。_____ p.10

投稿の仕方

- (1) 電子投稿システムの著者マニュアルを確認したか。_____ p.12
- (2) 倫理チェックリストにすべて回答したか。_____ pp.77-78

付録5 倫理チェックリスト (2015年5月現在)

「心理学研究」, “*Japanese Psychological Research*” 投稿論文倫理チェックリスト

昨今は倫理的配慮に対する要請が強まっており、このチェックリストは、投稿された論文が倫理的な要請項目をどの程度満たしているか、編集委員会が把握するために作成された。投稿時に各問いへ回答すること。満たされていない項目があるというだけで不採択になることはないが、編集委員から詳しい事情を確認する場合がある。

「公益社団法人日本心理学会会員倫理綱領及び行動規範」の趣旨を踏まえ、「公益社団法人日本心理学会倫理規程」に則り、研究の実施や論文作成にあたっては、リストの項目だけでなく、全般的に倫理的配慮が必要である。

1. 所属または関連機関に倫理委員会がありますか。 [はい] [いいえ]

研究を行うにあたりその承認を得ましたか。 [はい] [いいえ]

いいえの場合、その理由を書いてください。

2. 実験や調査に先立ち研究参加者からインフォームド・コンセントを得ましたか。
(インフォームド・コンセントには、実験や調査の内容についての説明や、実験や調査から自由に離脱できる旨が記されているものとします。承諾のサインを得ることが望ましいです。)

[はい] [いいえ]

いいえの場合、その理由を書いてください。

3. やむをえずインフォームド・コンセントが得られない場合は、代替となる手段をとりましたか。
(親や責任者による承諾を得るなど)

[はい] [いいえ] [該当せず (インフォームド・コンセントを得ている)]

いいえの場合、その理由を書いてください。

4. 実験や調査においては、研究参加者や動物に負荷やリスクはありませんでしたか。

[あった] [なかった]

負荷やリスクがあった場合は、その内容や、どのような対処・処置を行ったか、具体的に書いてください。

[負荷やリスクの内容]

[対処や処置]

5. 実験や調査にデセプションがありましたか。 [はい] [いいえ]

はいの場合、事後説明などによる対処の有無について書いてください。

6. 動物実験においては、必要最小限の個体数で実験しましたか。

(無駄に多くの個体数を用いませんでしたか。)

[はい] [いいえ] [該当せず (動物実験は実施せず)]

いいえの場合、その理由を書いてください。

7. プライバシーは保障されていますか。

(データ収集や処理、論文に紹介する際の匿名性の保障など)

[はい] [いいえ]

いいえの場合、その理由を書いてください。

8. 論文は著者自身によるオリジナルの論文ですか。

(オリジナルの論文とは他所に投稿中でない、または公刊されていない論文を指します。データの再分析が含まれるなど密接に関連する論文がある場合は、参考資料としてあわせてお送りください。)

[はい] [いいえ]

いいえの場合、その理由を書いてください。

9. 著者が連名である場合、連名者全員から投稿の承諾を得ていますか。

[はい] [いいえ] [該当せず (単著のため)]

いいえの場合、その理由を書いてください。

著者名の順序は貢献度を適切に反映していますか。

[はい] [いいえ] [該当せず (単著のため)]

いいえの場合、その理由を書いてください。

10. 他者が作成した材料やプログラムを用いたり、図表や本文を引用した場合、その出典は示されていますか。

[はい] [いいえ]

いいえの場合、その理由を書いてください。

原著者からの承諾を得ていますか。

[はい] [いいえ]

いいえの場合、その理由を書いてください。

11. 不適切、あるいは差別的な用語や表現がないかチェックしましたか。

[はい] [いいえ]

いいえの場合、その理由を書いてください。

12. 企業などと共同研究を実施、あるいは企業などからの助成を受けましたか。

(利益相反 (COI : Conflict of Interest) について、研究の公正性、信頼性を確保するためには、利害関係が想定される企業などのかかわりについて、適切に対応する必要があります。)

[はい] [いいえ]

はいの場合、その詳細を書いてください。

あとがき

個人的な話になりますが、四十年以上前私が大学院生であった頃はまだ日本の心理学集団は世界の端にいたような記憶があります。少数のいわゆる“国際派”の先生方だけが英文タイプライターで論文を清書して遠い欧米の学術ジャーナルに論文を投稿し、その結果の手紙が届くのを首を長くして待っていた姿を思い出します。その当時と比べると隔世の感があります。今や日本の心理学の大学院生が世界のどの学術ジャーナルに投稿しても何の驚きもありません。むしろ、現在は、若いときからそうしなければ斯界での将来の道が拓けない状況になっているともいえます。日本の心理学研究の国際的な評価は、まだ残念ながら自然諸科学や工学や医学の分野ほどには至っていませんし、意識もまだ欧米追従の雰囲気が残っているともいえますが、少なくとも日本から世界に研究成果を発信する態勢だけは十分に国際化してきているようです。あとは、いかにして、日本の心理学研究の評価を世界の中でより高いレベルのものとして認められるようにするかだと思います。母語である日本語によって心理学を学び、研究し、そして成果を挙げる、というメリットを生かしつつ、日本の心理学研究の成果が世界で妥当に評価されるようになるよう、その基盤作りを日本心理学会としても努力すべき時期だと思います。

このたび、約十年ぶりに『心理学研究』と“*Japanese Psychological Research*”のための「執筆・投稿の手びき」が改訂される運びとなりました。この間、論文の執筆と投稿のための世界的標準となっている American Psychological Association (APA) の Publication manual が我が国においても広く使用されるようになったこともあり、日本心理学会として同種の手引き書を発行する必要性は以前に比べて薄れてきた状況にあるともいえます。しかしながら、この間に日本心理学会では投稿を電子システムにて受け付ける形に変えましたので、それに対応した手引き書が必要となった次第です。

この「執筆・投稿の手びき」改訂のため、ここに至るまでに多くの方々のご尽力をいただきました。以下にお名前を記して謝意を表したいと思います。2009-2011 年の編集委員会委員長 箱田 裕司氏、同期間の電子化に伴う執筆・投稿の手びき改訂小委員会委員長の宮埜 寿夫氏、同委員の伊東 昌子氏、越智 啓太氏 (2013 年まで継続)、清水 寛之氏 (同)、針生 悦子氏、堀毛 一也氏 (同)、森川 和則氏、また、2011-2013 年には小委員会委員長として森川 和則氏、同委員として上淵 寿氏、鈴木 宏昭氏、高橋 登氏、さらには、統計的処理に関する近年の標準的要求について加筆をいただいた大津 起夫氏、図や表の例と引用文献の例を選定していただいた編集委員会副委員長の河原 純一郎氏、坂本 真士氏、中澤 潤氏の各氏です。その他直接、間接にお世話になりました多くの方々にも厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

2015 年 4 月 10 日

執筆・投稿の手びき 2015 年版

2015 年 5 月 1 日 発行

編 集 公益社団法人 日本心理学会機関誌等編集委員会

発 行 公益社団法人 日本心理学会

〒 113-0033 東京都文京区本郷 5 丁目 23-13

田村ビル

Tel 03-3814-3953

Fax 03-3814-3954

E-mail : jpa@psych.or.jp

制作 株式会社金子書房

© 日本心理学会 2015